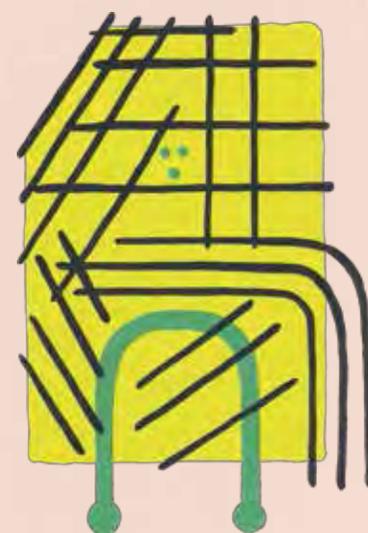
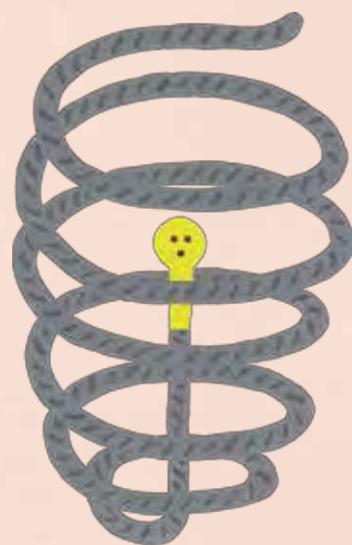


生活工房

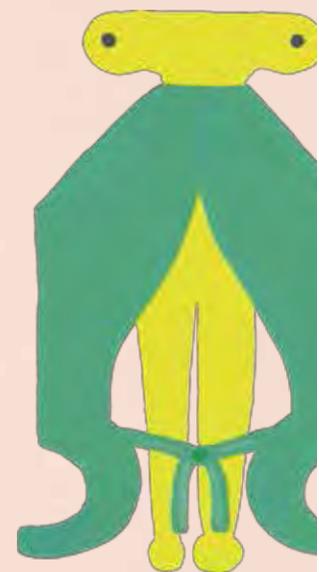
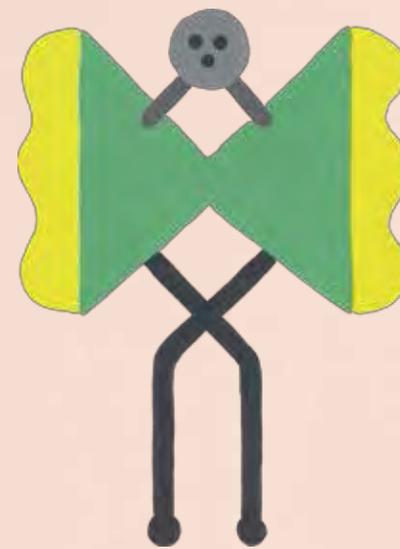
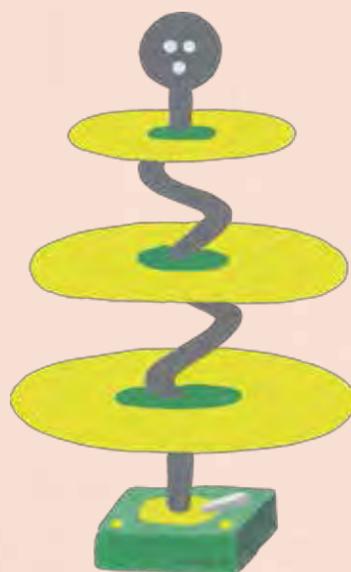
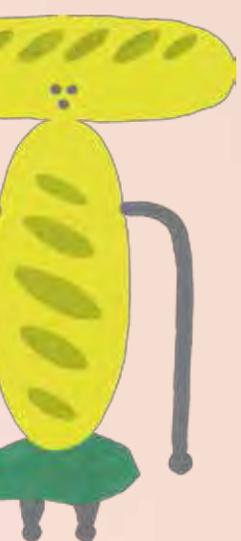
あつまる

あつめる



世田谷文化生活情報センター
生活工房
 Lifestyle Design Center

世田谷文化生活情報センター 生活工房
 〒154-0004 東京都世田谷区太子堂 4-1-1
 キャロットタワー 5F
 電話：03-5432-1543
<http://www.setagaya-ldc.net>





April 2016 - March 2017



COLUMN 15 : MADE IN OCCUPIED JAPAN 1947-1952 海を渡った陶磁器展

Keep Collecting!

文：田中莊子

オキュバイド・ジャパン(以下OJ)の品に偶然に出会ってから、かれこれ20年。魅力に取り憑かれて集めた数は、1万点におよびます。

OJの魅力はたくさんありますが、まずは「多様性」。1947〜52年の間に日本から輸出された品すべてですから、陶磁器のみならずカメラ、ミシンなどの精密機械、工具、玩具、釣具、布製品、木工製品、漆製品、セルロイドなど数えきれない種類です。戦後70年を過ぎましたが、いまだにこんなものも作っていたのだと「オキュバイド・ジャパン」のマークを見つけては驚くことがあります。

生活工房で展示した陶磁器類もほんとうにさまざま。安価で素朴な人形や実用品から欧州の製品と遜色のない(とコレクターは思っている)高級な人形や飾りものたちまで。前者は、「ダイム(10セント)・ストア」と呼ばれる町のよろず屋さんの店頭にあった品々。後者は、欧州の高価な輸入品と比べると求めやすい価格で、デパートやノベルティ商品専門店一般市民向けに売られていました。

また、カナダや米国の観光地では、OJの動物、フィギュア、塩・こしょう入れなどが、その土地のみやげ物として、店の棚に並びました。日本から太

平洋を船で渡った品々が、さらに観光地へ。みやげ物なので高級品ではありませんが、素朴でハッピーな雰囲気をつたえる品々です。旅行客の楽しい思い出をのせて60数年後の今、わたしの手元にあります。

魅力の二番目は、「作り手が見える」ことです。厳しい品質管理のない時代、大量生産であっても色や絵付けがひとつひとつ異なっています。手描きのカップ&ソーサーや絵皿には、いったいどれだけの時間をかけただろうと想像させる「美しさ」があります。人形やフィギュアも絵付けの仕方次第でそれぞれユニークです。

OJの陶磁器につくった人々の「エネルギー」や「誇り」を感じるのは、わたしが日本人のコレクターだからかもしれません。初めて手にした磁器人形の裏に「メイド・イン・オキュバイド・ジャパン」の文字を見たときに、衝撃をうけたのを思い出します。

「オキュバイド」という言葉は、「屈辱的な」、「悲しい」、「暗い」というネガティブなイメージを思い起こさせがちです。しかし、私の手にあるOJたちの発するメッセージは、「熱意」「誇り」「勢い」「エネルギー」です。戦後、日本全国各地で陶磁器生産と輸出に関わった人たちの息吹がこもっています。

そして、最後に一緒に集めるコレクター仲間との交流。

37年の歴史のあるコレクターの会(The O.J. Club)の会員たちと収集品に関して情報交換をしたり、お互いに売買したり。カナダと米国各地に住むコレクターたちは、数年ごとの集会で顔を合わすこともあります。また会えなくても会報やインターネットで情報を交換し、自分のOJ画像をシェアして自慢し合います。コレクター歴の長短に差はあっても、OJを愛する気持ちは変わりません。

「Keep Collecting!(集め続けましょう!)」会報の締めくくりの言葉は、この37年間全く変わっていません。戦争を経て、平和な時代になってつくられた品々は、在米日本人コレクターのわたしにとって「平和と愛情」のシンボルです。これからも集め続けます!

田中莊子 たなかしょうこ

東京生まれ、米国在住。ST Consultant and Trading Co代表とレブロン・サルタン、調査研究、翻訳、通訳業に携わる。1997年よりKathy Bizek氏にビスク人形と磁器人形の制作を師事。同時期にOJの収集をはじめ。米国 United Federation of Doll Clubs, Inc. 会員。2011年より米国 the Occupied Japan Club 代表。

本事業の詳細は P.32をご覧ください。



フィルムの「穴」からみえる風景

文・松本篤



あな「穴」不完全な所。他人が気づかない、よい場所や得になる事柄。番狂わせの勝負。(一部抜粋)

—— 出典:デジタル大辞泉

昨年度から継続している『穴アーカイブ:an-archive』。この活動は、昭和30〜50年代にかけて映像史上はじめて一般家庭に普及した8ミリフィルムのアーカイブをおして、市井の人々によって残された記録の価値を探索するプロジェクトです。それは、記録の外に広がる風景を、私たちの記憶や想像を持ち寄って見ようとする試みでもあります。『穴アーカイブ』とは、メディアとしてのモノ、メディアとしての人の働きについて、あらためて光をあてる取り組みなのです。

このプロジェクトが着目する8ミ

リフィルムは、かつて活躍し、今ではその役割を終えた古い映像メディア。一部の富裕層や趣味人が飛びついた昭和30年代。高品質化・低価格化が実現し、爆発的に流行した40年代。VHSなどの新しいメディアの台頭によって、急速に廃れた50年代。カメラとフィルムを手に入れた人々は、家族、地域、旅行、趣味など、時代ごとの身の回りの事柄に目を向けていきました。その結果、そこには当時の世田谷の街並み、暮らしぶりがしっかりと刻まれることになりました。

しかし目下、8ミリフィルムは所有者の自宅の押し入れの中に眠ったまま、劣化・散逸の危機に直面しています。そこで、それらを戦後復興、高度経済成長、安定経済成長といったそれぞれの時代をパーソナルな視点から捉えた「生活文化の記録」とし

さが宿っています。それは、映像や語りを媒介にした、参加者どうしの共同作業の場だからではないでしょうか。「私の撮った映像なんて、たいしたことないのに」。鑑賞会が始まる前、提供者は必ずといっていいほど謙遜されます。他者の視点の介在によって、提供者は、はじめて自分の映像の潜在的価値に気づかされるのです。この時、映像は提供者だけのものではなく、それを観た参加者との共有財になっています。

映像の活用も並行して進めています。「せたがやアカカブの会」は、公開鑑賞会でお披露目した映像を囲みながらあらためてじっくりと鑑賞し、スクリーンの外にひろがる風景について考える小さな集いです。誰かが残した記録を、他の参加者の声を聴きながら、眺める。それは「私」のものではないものを介して、「私」のまなざしがつくられる、不確かさに満ち

て位置づけ、収集・公開・保存・活用する本取り組みが2年前から始まったのです。

2015年初夏から本格的に動き出した『穴アーカイブ』。まずはフィルムの収集に着手しました。押し入れに眠るフィルムをひろく募り、ご家族や関係者を囲む上映会を行いました。スタッフは、スクリーンに映しだされた映像の内容だけでなく、フィルム提供者が想起した語りをもできるだけ丁寧な拾い上げます。あらかじめ用意された当時の地図に、伺った出来事やエピソードを書き込んでいくと、記憶の地図が出来上がっていきます。

「バスの運転手として、移り行く世田谷の街並みを長い間定点観測していた」「建設業に従事していた親が、区内の井戸の大半を手がけたんじゃない即興の創造行為とも言えます。目に入って来る記録、聞こえてくる記憶、参加者の思索が思いもよらない形で結びつくことで、映像の中の風景からも残っていない、これまで見えていなかった風景が一時的に立ち上がってくるからです。

記録の不在(穴)は、記憶や想像力を活性化させる「装置」として機能します。言い換えれば穴とは、私たちが自身が書き込み可能、読み込み可能なメディアであることを発見、再発見できる場所です。記録・再生装置としての「あなた」に光をあてる、いや、あなた自身が光になる、それが『穴アーカイブ』なのです。

※本テキストは、「穴アーカイブ:an-archive——世田谷の8ミリフィルムにさぐる」『せたがやアーツプレス vol.6』(初出)をもとに加筆修正したものです。



各回ともに100名以上の来場者に恵まれた会場では、映像や提供者の語りを引き金に、各所で大きな盛り上がりを見せていました。

一つの映像に対して複数の見え方が現れる——、鑑賞会にはそんな豊か

松本篤 まつもとあつし

穴アーカイブ企画者。1981年兵庫県生まれ。NPO法人記録と表現とメディアのための組織(レボ)にて、「文房具としての映像」というコンセプトのもと、さまざまなワークショップやプロジェクトに携わる。市井の人々による記録の価値を探索するアーカイブプロジェクト(AHAI)を企画運営。著書に『フィルム映像術』(古今書院/共著/2015)などがある。



あつめるあつまる生活工房

COLUMN 02：日本のポータブル・レコード・プレイヤー展

「集める」＝体感による 世界観の構築

文：田口史人

ぼくは小学生のころから収集癖があり、今まで集めていた物は、本やレコード、切手、即席ラーメンの袋、ふた、即席カリーの箱、空き缶、マッチ、ボードゲーム、懐中時計、コーヒーマシン、ポータブル・レコード・プレイヤーなどいろいろありますが、現在は、レコードに関するものにほぼ絞られています。

ぼくの家は「物」であふれかえっていますが、「物」を収集するというよりも、事例を収集しているという感覚が強く、そこから見えてくる世界に興味があるのです。ですから、収集しているのは「物」とは限りません。場所に行くことだったり、誰かに会うことだったりもします。現在レコードが家に何枚あるのかはもうわかりませんが、恐らく三、四万枚か、もしかしたらそれ以上あるかと思っています。集めているのは、もっぱら日本のレコードです。音楽とは限りません。「日本の文化の中で生まれたレコード」に興味があり、自分の中にある「日本のレコード地図」を更新させてくれるような力が強いものにほど惹かれます。そうすると手元に残るのは、事例として珍しいレコードや、知っている人がほとんどいないようなレコードの割合が増えていくことになりすが、中心より裾野の方が広い以上、当然の結果でしょう。

ぼくは主に古物屋さん、リサイクルショップなどでレコードを買いますが、そのような場所だと、たいてい店のレコードへの意識は低く、入ってきたものが無差別に山積みされています。大ヒットしたレコードは当然何枚も見ることになります。こんな店の在庫を片っ端から見ると、買う以前に、どのレコードが世の中にどれほど浸透し、今、どれほど手放されているのかを実感することになります。そして、それぞれの現在の状態を何枚も何枚も見ること、それらがこれまでどのような扱いを受けてきたのかを手で実感します。そうした体験と、データを照らし合わせると、データだけでは知りえなかった意外なことが浮かび上がってくるが多々あります。

物を集め、ある量を越えていくと、それが世の中でどのような位置にあり、どのように扱われていたのかが感じられてきます。そして、切手なら切手の、マッチ箱ならマッチ箱の、それぞれの世界があり、その全体の大きさと平均的な質が次第に想像できてきます。そして、その世界が感じられてきたからこそ想像できる、未だ見たことは無いけれども、存在している可能性を追い求め、さらに、その想像の枠外の現物に遭遇し、自分の世界観が少しずつ塗り替えられていく、それが収集の醍醐味というものです。

「集める」ということは体感による世界観の構築です。その感覚を養うことは、すなわち別の見知らぬ世界にも固有の世界があることを想像する力を養うことでもあります。そして、それぞれの世界は社会に位置付けられながら固有の世界を同時に持っていることが実感として染み込んでくるのです。

田口史人 たぐちふみひと

高円寺甲斐屋リク商店主。1990年頃から音楽ライターとして活動、同時に新作、旧音源の復刻などのD制作を始める。これまでに300タイトル以上を発表。全国各地で「レコード客席」という出張トークショーも行っている。

本事業の詳細はP.35をご覧ください。



ASUNA+田口史人パフォーマンス「100 Keyboards + 100 Portable Record Players」(P.35参照) 撮影:高見知香

7つの海と手しごと 航海図

5 「オホーツク海と
ウイルタのイルガ」
2014年



白樺樹皮・アザラシ皮製バッグ
所蔵：北海道立北方民族博物館

2 「北極海とイヌイットの
壁かけ」 2011年



「アザラシを解体する」(エヴァ・ジャーカー作)
所蔵：北海道立北方民族博物館

7 「北太平洋と
北西海岸先住民の
トーテム」 2016年



ボタン・銅版付ダンス用前掛け
所蔵：北海道立北方民族博物館

3 「地中海とトルコの
イーネオヤ」 2012年



イズニック地方のオヤスカーフ 所蔵：ミフリ 野中幾美氏

6 「インド洋とスンバ島の
ヒンギノラウ」 2015年



ラウ・ヒンギノラウ 所蔵：渡辺芳知子氏

1 「カリブ海とクナ族のモラ」
2011年



「魚を持つ魚人」 所蔵：宮崎ツヤ子氏

4 「ギニア湾とヨルバ族の
アディレ」 2014年



「Ibadandun」 所蔵：東京かんかん

あつめるあつまる生活工房
COLUMN 03 : 7つの海と手しごと
**7つの海をまたにかけ、
手しごとと物語を探る旅へ**
文：生活工房

「世界は海でつながっている」を合言葉に、世界の海沿いに住む人々の暮らしをその手しごとを通して紹介してきた「7つの海と手しごと」シリーズ。飛行機による旅が始まったのはほんの100年ほど前ですが、はるか昔から続いてきた海を介しての交流や新天地を目指しての大航海に想いを馳せながら、2011年より展示会を開催してまいりました。

〈第1の海〉はパナマ共和国のカリブ海沿岸に暮らすクナ族の、モラと呼ばれる民族衣装のブラウスに施されたアツプリケ刺繍。〈第2の海〉は、北極海に広がる大雪原に生きる、イヌイットが作った壁かけ。〈第3の海〉は、トルコの地中海近郊の養蚕地帯を中心に発展したスカーフのふち飾り・イーネオヤ。〈第4の海〉はギニア湾沿岸に暮らすヨルバ族の藍染め・アディレ。〈第5の海〉はオホーツク海・サハリン島の少数民族・ウイルタのイルガと呼ばれる紋様。〈第6の海〉はインド洋に浮かぶスンバ島に伝わるイカット(絣織物)・ヒンギノラウ。そして今年度、最後の〈第7の海〉では、北米大陸北西部の海岸沿いに住む、北西海岸先住民のトーテムが描かれた手しごとを取り上げました。

展示会では、手工芸品とその歴史や技術を紹介するだけでなく、手しごとが生まれた土壌としての、現地に伝わる神話や思想も紹介するように試みました。海とともに生きる人々ならではの智慧と感性、信仰がそこにあり、手しごとにも色濃く反映されています。

北極に暮らすイヌイットたちは、アザラシは好奇心が旺盛で、人間世界を見るために氷の穴から顔を出していると考えています(実際には海面が凍結した後、呼吸をするために顔を出すそう)。とくにアザラシは人間の「真水」というものに興味があるとされているため、ハンターは最後のとどめを刺す前に、真水を飲ませてあげる慣習があります。

西アフリカ・ギニア湾沿岸のヨルバ族の神話では、時のはじめには空の下に海と沼地しかなかったけれど、天上神が長い金の鎖を作って波の打ち寄せる海まで下りていき、カタツムリの殻の中に入れた砂をまいて、雌鶏を放って砂を蹴散らせ大地をつくったとされています。「オロクン(海の女神)」と題されたアディレには、カタツムリと雌鶏も登場します。

北アメリカの北西海岸先住民・ハイダ族の神話では、ワタリガラスが人間をこの世に連れ出した話が伝わっています。まだ誰もいない世界でワタリガラスの神さまが浜辺を歩いていると、砂浜からあぶくが立ち、小さなささやき声が聴こえてきました。よく見ると、ハマグリが少し開き、中から小さな顔が覗きかすように覗いています。ワタリガラスが「でておいで」と小声で呼びかけると、最初はためらっていましたが、あとからあとから小さな人々が現れました。これが最初の人間(ハイダ)であり、今も海辺に暮らしているのです、というお話。

わたしたちの遠い祖先は、海から生まれたとされています。同じ海から生まれ、今も海辺に暮らしている人たちに会いに、さあ、航海に乗り出しましょう。

本事業の詳細はP.37をご覧ください。

イラスト：間芝勇輔

TALK SESSION：うたの記憶と出会うときークレオール・ニッポンの旅先から

トークセッション 忘れられた歌の先にあるもの

世界各地をフィールドワークする「うたう旅人」松田美緒さんの活動を、人類学者の石倉敏明さん・川瀬慈さんとともに辿り、土地に残る歌が宿すものについて語り合いました。

歌が教える多様な日本

松田 ◆ 2014年に出したCDブック『クレオール・ニッポンーうたの記憶を旅する』の中で、私は「民謡歌手か」というほど民謡ばかり歌っているのですが、いわゆる日本の民謡ではありません。日本各地の忘れられた労働歌や世界中に散らばる日系人コミュニティの歌、隠れキリシタンの歌を取り上げて、「多様な日本」を歌で辿っています。

石倉 ◆ 一昨日までチベットにいたとか？

松田 ◆ はい、山の上から裾野まで広がる巨大な仏画「タンカ」の御開帳を見ることができました。お経を読む女性たちの声が、ピンとした空気に乗って、遠くまで聴こえてくるんですね。知人のお兄さ

んも歌ってくれたのですが、現地の荒々しい自然の風景と本当にぴったりで。それも秋田県 鹿角の歌に似ていたんです。

石倉 ◆ そうなんですか！

松田 ◆ 日本人も多種多様な血が混ざり、今の私たちがいる。それを歌は覚えていないんじゃないか、というコンセプトで『クレオール・ニッポン』はつくったのですが、チベットはとても近い気がしましたね、深い所で。

石倉 ◆ ローカールに行けば行くほど、違う地域との類似性が感じられて、すごく深い所につながっているんじゃないかという発見があります。それが楽しくて人類学を続けているようなところもありますよね。

川瀬 ◆ そうですね。もちろん自分が計画する研究もあるのですが、何となく巻き込まれて深い部分と呼吸し合ひ、つながっていくというような展開にも、ある程度身をゆだねたいですね。松田さんとフィールドワークをしていると、歌がまた新たな歌をつないで、歌のつながりの中に人と

人との出会いがあり、それがまたすごくエキサイティング。

石倉 ◆ ビグミーとかクリー族とかチベットのカーポベルデとか、いろんな回路がつながって開かれていくのが、すごく21世紀的だという気がします。学生時代にワールドミュージックが流行りましたが、その当時はフォーマットが少し違い、「世界は一つ。文化は違うけど、自然は一つだよ」という考え方で、外国に行くと皆が仲良くするべきという漠然としたビジョンでした。それがこの20年くらいでズタズタに傷つき、本当に分かり合うことができるのかと問われるような厳しい体験を積み、それで今何が見えてきたかという、国という単位ではなく、尺度や精度が細かく絞られた世界だと思うんです。最近日本にもブラジルからの移民が働く地域が増えていますし、世界と日本がどんどんハイブリッドになっている。それとこの『クレオール・ニッポン』の主題が、すごくオーバーラップして見えます。

川瀬 ◆ このCDブックで押し出したかったという意味においても松田さんの活動は、単に歌を記録するのではなく、再び歌うことで、歌に付随する生活文化、海、山、川、高原など、人々が長い時間をかけ、創意工夫をもってつながってきた場所へのつながり方をもう一度呼び起こすような、非常に壮大なプロジェクトだと考えています。

歌とつながる文化や場所

た点って、そういう部分もあるんじゃないですか。

松田 ◆ そうですね。画一化した日本ではないものを、歌が教えてくれると思って。

歌のあるところ

石倉 ◆ 松田さんは、生家近くにある秋田の民族芸術研究所で、各県の調査記録の中から各地の歌を聴いたそうですね？

松田 ◆ そうなんです。それでピンときた歌は僻地で特別な場所が多くて、CDに入れた日本の歌も、鹿角は縄文遺跡の多い場所です。徳島県の祖谷は平家の隠れ里、それに隠れキリシタンのいた長崎の伊予島や小笠原の父島の歌でした。気付いたのは、どこも水田耕作ができない場所なんです。

石倉 ◆ 日本といえば、お米を最初に思い浮かべがちですが、もう少し精度を高めて見ていくと、田んぼができない地域があり、そこにユニークな歌が残っていたという気があった。

松田 ◆ もちろん田んぼのある地域にもたくさんいい歌はあるのですが……。チベットで祖谷の歌を歌ったら、「ああ、なんかいいねえ。山が見えるよ」と地元の方に言われました。このCDブックでも、各地の歌を「山の歌」「海の歌」と分けているのですが、声の出し方やメロディの起伏に共通するものがあると思います。

歌とつながる文化や場所

川瀬 ◆ ここ一年くらいずっと松田さんと一緒に、国立民族学博物館のプロジェクトで祖谷に通っていますが、その土地にすごく詳しいんですね。文字情報というより、体で感じている。歌を編み出した人々の根底に通じるような意識や意図を、深いレベルで嗅ぎ取ってくる。そして祖谷の歌を習うだけではなく、それを彼女自身の非常にオリジナルなやり方で解釈して、地元の人へ歌っていく。そんな松田さんの歌をまた地元の人が喜んでね。乗ってきて、ともに歌い踊るんですよ。

石倉 ◆ 私の暮らす秋田でも民謡を歌う人はたくさんいて、とても上手です。すごくいいと思う反面、労働歌とか守唄とか、残っていないものもたくさんある。痕跡はあるんです。酒蔵に行く「よい歌を心を込めて歌うべし」と柱に書いてある。酒造りで權入れをしていて、歌でその回数を数えたりするんです。でもそういう歌はあまり残っていない。何かから切り離れた歌というのは、とても一部であって、本当は生活やお祭りなどいろんなものにつながっていると思うし、それがこのCDブックを読むとたくさん見えてくる。木挽き歌なんて、木を伐っているシーンが目につかびますよね。

人との出会いがあり、それがまたすごくエキサイティング。

歌とつながる文化や場所

川瀬 ◆ そういった意味においても松田さんの活動は、単に歌を記録するのではなく、再び歌うことで、歌に付随する生活文化、海、山、川、高原など、人々が長い時間をかけ、創意工夫をもってつながってきた場所へのつながり方をもう一度呼び起こすような、非常に壮大なプロジェクトだと考えています。

松田 ◆ この前チベットで思ったのですが、宴会の時に人をもてなすために歌ったり、人と競い合う歌がたくさんあったりして、祖谷でも昔から歌のうまい人が、競い合うように歌い合っていた。かつてはエンターテインメントというのは歌やお祭りだけで、歌でお互いが楽しむ文化があったんです。今は世界中で、歌わなくなっている。皆さんは、歌を歌っていますか？ カラオケじゃなくて、普段から歌うといいと思います。

石倉 ◆ 「クレオール・ニッポン」の旅はまだ続きますか？ 全然終わった感じがしなくて。

松田 ◆ このCDブックをつくった後は、しばらく何もできないと思っていました。石倉さんからもいろいろ話を聴いたりすると、まだ全然できていないという感じがしてきて、これからだと思っています。

(2017年2月12日生活工房にて。構成：生活工房)

川瀬慈 かわせいつし

エチオピアの吟遊詩人や楽師の人類学研究を通して「記録」と「表現への欲望」の間で揺れ動く。映像作品に『ラリベロッチ』、『精霊の馬』、『Room 11, Ethiopia Hotel』等。共編著に『フィールド映像術』、『アフリカン・ポップス！ 文化人類学からみる魅惑の音楽世界』。



石倉敏明 いしくらとしあき

秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻講師（芸術人類学／神話学）。明治大学野生の科学研究所研究員。共著に『野生めぐり 列島神話をめぐる12の旅』、『人と動物の人類学』、等。高木正勝によるCD付属の神話集『タイ・レイ・タイ・リオ縮記』編纂。



松田美緒 まつだみお

土地と人々に息づく音楽のルーツと魂を身体で吸収し表現する「うたう旅人」。2014年、3年がかりのライブとフィールドワークの集大成として初のCDブック『クレオール・ニッポンー歌の記憶を旅する』を発表。



「踊り」とは、無意識の希望を 叶える「部屋」であった

写真・文・イリナ・グリゴレ

高校生の私は、引きこもって図書館の本を借りて読んでいた。本を通して人間とはなにかを知りたかったこともあった。目が疲れると少しの間コンクリートできていた団地の窓から外を見ていた。ある日、向かいの団地から濃い霧の中に自転車を押してゆく男性の姿が現れてくるのが見えた。その自転車の後ろには、五歳ぐらいの女の子が座っていた。毎日、本を読んで疲れていたのかもしれないが、私はなぜかこの二人のイメージに感動した。数年後、映画監督をやっている人にこのエピソードを喋ったら「それは映画的時間だ(cinematic time)」といわれた。このようなイメージとの出会いは、人間が生きているなかで気づかなくても何回もあることなのだろう。

この、映画的時間とは、踊りとういう関係なのだろうか。ふたたび、私の高校生時代に話をさかのぼって説明したい。そのころ、もう一つ大切な出会いがあった。アンドレイ・タルコフスキー作の映画、『ストーリー』だ。この映画からは、今に至るまで感動のあまりに自分の言葉で説明できないほどの素晴らしい哲学、詩、アート、それらすべてを身体で感じた。映画の一つ一つのシーン、イメージ、言葉からは、何回見ても解けない問題のような魅力を感じた。そのあとの私の人生で何をやってもこの映画が参考になるといってもいいぐらい、私にとって大切な作品だ。当時、何回見てもすべてを理解できなかったのだ。
大学三年生の時、日本に留学するこ



とになった。本で読んだ遠い島国に行くことを決めた。人生で初めての飛行機から降り、バスの窓から見えた青森県の田んぼのイメージが感動を与えた。窓の外の、今この場のイメージが深く身体に響いた。昨年で日本に来て十年経った。獅子舞との出会いは、一番深く私の人生の旅を築いた。獅子舞の研究をはじめて十年経つ今では、高校生の時に解けなかった映画のイメージを理解できるようになった。

人の希望は何でも叶えられる。しかし、部屋にたどり着く道は目で見ることはできないため、「ストーリー」という案内役の人物の感覚によってのみ導かれる。この映画は人間のすべてを問うている。十年経って、私は気づかされた。人間は何を指しているのか。それは自然に還ろうとしているのだ。獅子舞も、その他のあらゆる「踊り」というものも、そのような物語だ。Zoneとは、大自然のことであり、踊りとは身体でその大自然を探すということなのだ。人間とはその大自然の一部だと「踊り」が教えてくれた。私にとって獅子舞は生き物であって、案内役を務めていたのだ。その部屋に入れば無意識でも希望は叶えられるのだが、人間の欲望はどういった結果を果たすのかはこれから分かることだろう。

獅子舞は踊りでありながら、同時に人間の物語でもあり、「人間とはなにか」という問いを探求する機会を与える場でもあるのだ。映画『ストーリー』の中で、「作家」と先生(アートのと科学的思考の矛盾を象徴する)と呼ばれる二人の登場人物は、Zoneに導かれる。不可解な原発事故の跡地に一室があり、そこに入

イリナ・グリゴレ

1984年ルーマニア生まれ。2006年1年間日本に留学し、2007年から日本の獅子舞の調査を始める。一時帰国後2009年に国費留学生として来日。研究テーマは北東北・東京における獅子舞・獅子踊りに関する人類学的研究など。

IALOGUE：14歳のワンピース

ワンピースと歳を重ねて 再会対談

14歳の女子中学生の心模様をテキスタイルにするワークショップ「14歳のワンピース」。今年度で6年目となりましたが、かつての14歳は今、どんな女性になっているのでしょうか？講師であるspoken words projectの飛田正浩さんと、高校3年生になった参加者の三宅明歌さんが4年ぶりの再会を果たしました。

17歳のワンピース

三宅 ◆対談のお話をいただいて、改めてワンピースをクローゼットから出してみました。やっぱり14歳の心情を直球で訴えかけたようなデザインだから、今ももうそれが良いとは感じない、恥ずかしいって感じるって思っていました。けれど妙にしくりきたんです。それは当時考えていた意図とは違うのですが、まるでこの前あったことが表現されているかの

ように見えました。きつといつでも私は私で、ワンピースも17歳の私としてとらえることができたんです。「これが私」であって、4年経った今も誇らしく思える。時間と共にいろんなことが変わっているのに、このワンピースが原点であり続けている。それってすごいなって。

飛田 ◆その話を聞いて自分の記憶を探ると、それが洋服なのか文字が写真かいろいろあると思うけど、それなりに純度を持ってつくったものって、自分の歳とともにそれが一緒に成長していく。それだけ気持ちを入れてつくれたんだらうね。そういう話を聞くにつれ、この企画をやっているから話も聞いてみたい。

三宅 ◆ワンピースが手元に送られてきて、しばらく着られない時期も実はありました。「こんな着れない……」と思ったことがないとは言えない(笑)。けど、高校に進んで新しい環境でいろんなことを学んでいくうちに意識が変わって、

それこそ劇場(編注：三宅さんの中での譲れない部分として、劇場＝神聖な場所)にも着ていけるようになったんですよ。他の参加者の子たちに比べると「どうした？」って柄ですよ。これを着た人が前から歩いてきたら、みんな引くだろうなって(笑)。でもやっぱり、すごく好きなんです。

飛田 ◆洋服をつくっている側としては、そういうことがもっと頻繁に起きればいいと思うんだよね。自分でデザインした自分の年齢相応の服を持つということが、いつまで着れるのかという問題もあるけど、オリジナリティが強いから、気持ち次第ですと着れるよね。つくった直後は着れなかったというのは、揺れ動いていた時期と相まってなのかもしれないけど、丁寧に、きれいに柄をつくってるよ。

三宅 ◆ワンピースの背中の部分は憧れの世界をイメージしてデザインしたんです。当時、ダンスの先生が憧れの存在でした。時間とともに憧れの存在は違う人

ちゃんと実現させているよね。自分では14歳の頃に思っていた17歳になれてる？

三宅 ◆あの頃は、未来がどうなるのか全く予想がつかなくて。精神的にもめちゃくちゃしていたし、環境が変わってのも上手いかなあと後ろ向きに考えていたのですが、今はとてもいい環境にいると思っています。この前の公演では、一曲だけ一番前に出て踊ることができたのですが、転んでしまったんです。舞台袖にはけた時は涙をこらえることが出来ませんでした。公演は大成功でしたが、私としては素晴らしい環境とそこでの時間が、未完のままに終わってしまったようにも感じられたんです。これが14歳の私だったら、転んだことを後悔して、ずっと悩むと思うんです。でも今の私はそのことを前向きにとらえられた。失敗しても、その時の全力なんだからって。この公演は終わりじゃない、次への確かな始まり。未完なのは当然で、だってここで完結しちゃったら、もうそれでおいまいですから(笑)。

飛田 ◆自分の意志で選んだ道だから、その失敗も全部受けとめられる。そういうことは欲していてもなかなかできないのよ、本来。夢が分からないとかね。14歳の頃からやりたいことが明確にあって、早熟というか、早くビジョンがある

ばあるほど悩みも大きいけどね。

—もう来春は、高校卒業。大学でも身体表現などをするのですか？

三宅 ◆表現とは全く別の哲学や文学を学ぶことにしました。さまざまなお話を広く学んで、最終的に自分が最も興味を持つものを選んで深めていこうと思っています。舞台一本という気持ちもあつたし、将来は表現する側になりたいので、その技術を学ぶのもいいと思ったのですが、例えば作品をつくる時に、この表現を哲学的な視点から見たらとか、客観的な視点で表現を考えることができるように視野を広げたくて。

飛田 ◆表現者の話になったけど、文字だって表現の道具であるし、身体だってそう。だからファッションデザイナーをしていて、不安や心配もあるけど、それでもやっただけ「みたいな自信は、ファッションにたどり着くまでにいろんなものを見てきたという自信があるから。自分で選び学んでいくということは、最終的にもし母親になって家庭に入ったとしても、母親としての自信みたいなものが、そういうところから付くのかもしれない。身体表現から別の方向に行くことが、決して表現者じゃなくなるってことではないと思うよ。

(2016年12月7日生活工房にて)



出来上がったワンピースを着用した14歳の三宅さん。

純度を持ってつくったものは自分の歳とともに一緒に成長していく (飛田)

飛田正浩 とびたまさひろ

多摩美術大学染織デザイン科卒業。在籍中より「spoken words project」として表現活動を行う。卒業を機にブランドとして改め、1998年に東京コレクションに初参加。ファッションの領域を超えて活動中。

このワンピースが自分の原点であり続けている (三宅)

三宅明歌 みやけさやか

14歳の時にこのワークショップに参加。関東国際高等学校演劇科にて、ミュージカルを通し舞台表現を学ぶ。今後は視野を広げ、独自のスタイルを築きながら人を幸せにできる「表現者」を目指す。





「14歳のワンピース」撮影会での集合写真 撮影：ゆかい

COLUMN 05: いぬと、ねこと、わたしの防災 いっしょに逃げてもいいのかな? 展 同行避難をめぐる集まった付箋

文: 生活工房

「いぬと、ねこと、わたしの防災 いっしょに逃げてもいいのかな?」展は、ペットとの同行避難について考えるために企画した展覧会です。

動物との避難については、環境省や各自治体が発信していたり、専門の書籍も発行されています。それでも今回、あえて展覧会という形で開催したのは、同行避難に対していろんな立場の方が様々な意見をもっているけれど、それを互いに共有したり、語り合ったりできる場というのがこれまでなかったから。展覧会タイトルが「いっしょに逃げてもいいのかな?」とギモン形なのも、いろいろな意見をこの場で出し合って、ともに考えていきたいという思いからでした。

展示会場では、災害時におけるペットとの行動シミュレーションや、避難所での過ごし方の紹介、用意しておくべき防災グッズなどが並び、「もしも」の日のことを少しリアルに感じられるようになっていきます。そしてその一角にボードを設け、来場者のかたにペットと防災について思うことを、ペットを飼っている人は青い付箋、飼っていない人はオレンジの付箋に書いて貼っていただきました。

「ペットを飼っている人の意見から」

「ペットだって家族の一員です。必ずいっしょに逃げます。うちではペット用の防災グッズを用意していますがそれだけでは足りないはず。避難所にもペット用のものを置いてほしいです」

「うちのネコは自分の子どもだと思って育てています。ペットは…という扱いを受けるのは多少は仕方ないことだけど、離れて暮らすのは人間側に多大なストレスが生じます。心身ともに大変な避難所生活で子どもに会えないストレスは心配です」

「ペットを飼っていない人の意見から」

「ペットが家族“であり”命“なのはよくわかります。大切なのは、飼い主さんの事前準備。有事の際に感情的に“命”を主張するのではなく、知って備える(物や人脈)ことがまず飼い主さんの義務だと思う」

「うーん、難しいかも。動物の声、子どもの声。精神が過敏になっている時に受け入れられるかな?でも優しい心は持っていたい」

「水や食料が配給になって限られている時、ペットに水を飲ませている人が不愉快だと思います」

ペットを飼っていない人が「しよせんペット。人間が大事」と書いたオレンジの付箋の上には、ある日、「ペットは飼っていないが、すごく癒しになると思うので、ペットの避難場所も作ってほしいと思う」というオレンジの付箋が貼られています。

飼っている人/飼っていない人の2項対立ではなく、その中にもいろんな考え方・感じ方があるのだということが、ここから見えてきます。避難した先では、もっと多くの意見が直接的に交わされることでしょう。災害時の極限状態をみんなで乗り越えるためにも、ふだんから家族や近所の人と話し合い、モノだけでなく心も準備することがまず大切なのではないのでしょうか。

最後にもう一つ、オレンジ色の付箋を紹介いたします。「私は動物を飼っていませんが、お互いが、『いっしょに逃げてもいいんだよ』と思えますように」



COLUMN 06：始末をかくエキシビジョン 生活はふるさとのように上演されている

「生活をする」とは何か問うために。

文：岸井大輔(始末をかく／劇作家)

生活工房は暮らしのデザインセンターなのに、実際には誰も暮らしていない。で、生活をしてみることにした。例えば、ギャラリィで寝起きし、キッチンで食事を作り、洗濯をし、生活工房がしまる夜には、仕事に出かける。しかし、何をもって、ある場所で生活をしているといえるのか、そもそも生活とは何なのか、と考えると難しい。定義できないからというより、一人ひとりが答えが違うような問いだからだろう。世田谷の財団の企画である以上、区民の考える生活をするべきだと僕は考えたけれど、その答えは区民の数だけあるに違いない。

それぞれの方法を考えてほしいとお願いした。あるメンバーは、その場所に行く口実をつくり何度も通うことで接点を探し、つくることだと言った。あるメンバーは生活をつくり上げていく、かつては妖怪といわれていたような独特なイメージがあることが生活だと言った。あるメンバーは、誠実な行為と記録がつくり出していると考えた。計画をたてていく中で、生活が困難になったときにこそ、生活とは何かという問がなされることを見てきた。何らかの事情で家をなくしたり仕事をなくしたりしたときや難民やなにかが生活について考えるんじゃないか。逆に言えば、生活はちょっとしたことでも乱れ、なくなってしまうようなものなのではないか。

すると、日常の現実の町並み、さまざまな人の暮らしは、それぞれの信じる生活を維持する上演に見えてきた。僕は演劇をやってきていて、で、演劇では上演をはかないものだからこそ何より大事にするけれど、生活も同じではないか。約2ヶ月にわたる「始末をかくエキシビジョン」生活はふるさとのように上演されている「をきっかけに」日常普段の生活を祈りの連続として感じてもらえるようになったらと願いながら構成した。



代田富士見橋(世田谷区代田)



companyギャラリー(埼玉県東松山市神明町)



ひなた村(町田市本町田)

*生活長者展について

ほんとうの善人が36人いるので、神はこの世界を滅ぼさないと、ユダヤ教は説く。ところで、ほんとうの善人というのは、ほんとうに善人であるから、自分が善人であることを言わないし、自覚すらもたない。だから、自分が世界を救っているのだと知ることもない。

能性を捨てない普通の市民たちを心から尊敬する。彼らが集まっているさまを、いっしょにこっそり眺められたらと思う。気づかれないようにね。

*生活長者六カ条

- 一、「生活長者」は、自らの生活の周囲を少し豊かにする
- 二、「生活長者」は、生活を大きく変化させることなく、自分のできる範囲で、個人的興味関心主導で「コト」を興す
- 三、「生活長者」の活動は、生計と一致しない(生業ではない)
- 四、「生活長者」は、不特定多数の他者を受け入れる土壌をつくる
- 五、「生活長者」は、社会的な活動であることを目的とすえていないが、結果的に社会性をおびる
- 六、「生活長者」が活動に専従しないことは、専門性から離れることを意味するわけではなく、生活と融合した専門性のあり方をつくりだす

この考えに共鳴してくださいました人に、生活長者をよく見る場所を提案していただき、その場所にポスターを掲示した。居酒屋、アトスペース、商店街など、いろいろな場所が提案された。が、そうやって問われることそのものが、参加者が生活に何を求めているかを明らかにしたと思う。結局14の、さまざまな生活長者のいる場所が提示された。



古書 bangobooks(台東区谷中)

僕らは、この国や世界が、かろうじて平穩に維持されているのは、ほんとうの市民がほんのわずかだけれどいるからだろうと考える。ほんとうの市民とは、たとえば、自由に自活しながら、まちとか未来に関心をもち、アートとか教育とかを愛している人たちのことだ。普通だ。普通なので、自分から、この社会を成り立たせているのが自分たちだとも気がつかない彼女らを、「生活長者」と呼びたい。

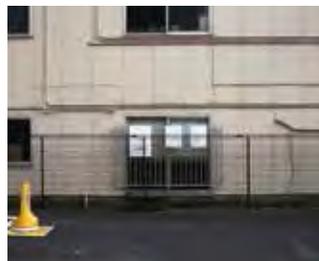
良識より大きな声が愛され、多様性より成果が求められる現状に対抗して、「生活長者」に光を投げかける展覧会を企画する。僕は、まっとうな「生活者」と会い話をするに喜びを感じるし、この世界が万人に開かれる可

岸井大輔 きしだいだいすけ
1970年生。劇作家。演劇とは何かを考えて、いろいろな場所は人たちがや機会に演劇をつくる。代表作「potahue」東京の条件「好きにやる」この喜劇「メディー」

本事業の詳細は P.38 をご覧ください。



美学校(千代田区神田神保町)



space ofke(台東区日本堤)



始末をかくエキシビション「生活はふるさとのように上演されている」2幕より
《生活工房で生活する》撮影：松尾宇人

特集 あつめる、あつまる生活工房

- 04 Keep Collecting! 文=田中荘子
- 06 フィルムの「穴」からみえる風景 文=松本篤
- 08 「集める」=体感による世界観の構築 文=田口史人
- 12 7つの海をまたにかけ、手しごとと物語を探る旅へ 文=生活工房
- 14 忘れられた歌の先にあるもの トーク=松田美緒・石倉敏明・川瀬慈
- 16 「踊り」とは、無意識の希望を叶える「部屋」であった 写真・文=イリナ・グリゴレ
- 18 ワンピースと歳を重ねて 対談=飛田正浩・三宅明歌
- 22 同行避難をめぐる集まった付箋 文=生活工房
- 24 「生活をする」とは何か問うために。 文=岸井大輔

- 28 生活工房の事業
- 29 目次

EXHIBITION 事業報告

- 32 MADE IN OCCUPIED JAPAN 1947-1952 海を渡った陶磁器展
- 33 いぬと、ねこと、わたしの防災 いっしょに逃げてもいいのかな?展
- 34 DAYS JAPAN写真展2016 地球の上に生きる「世界の未来をつくるために」
- 35 日本のポータブル・レコード・プレイヤー展
- 36 留学生研究発表会 JAPONDER 2016 獅子になる
- 37 7つの海と手しごと(第7の海) 北太平洋と北西海岸先住民のトーテム
- 38 始末をかくエキシビション 生活はふるさとのように上演されている

WORKSHOP 事業報告

- 40 子どもワークショップ2016 14歳のワンピース
- 41 子どもワークショップ2016 夏休みにいれるバッグをつくろう!
- 42 子どもワークショップ2016 世田谷ロケハンアニメーション in NHK技研
- 43 子どもワークショップ2016 分解ワークショップ パソコン&オーディオの仕組みとふしぎ!
- 44 中学生次世代車教室2017/新年を祝う お正月飾りづくりワークショップ

SEMINAR 事業報告

- 46 生活工房×イシス編集学校 情報編集力連続講座
- 47 NPO・市民活動のためのステップ・アップ講座 組織づくりのためのヒント/コツを学ぼう!!
- 48 うたの記憶と出会うとき クレオール・ニッポンの旅先から
- 49 食べられるセミナー 夜と生活工房
- 50 朗読講座 豊かなことばの世界/「森・里・海の連環」による豊かな海づくり レリーフジオラマ

LOCAL COMMUNITY 事業報告

- 52 穴アーカイブ:an-archive
- 53 世田谷アートフリマ
- 54 みっける365日 アーティストと探す「人生の1%」
- 55 おはなしいっぱい
- 56 市民活動支援コーナー
- 57 世田谷市民活動支援会議/国際交流 in せたがや2017

- 58 プレイバック2016
- 64 生活工房施設ガイド
- 66 生活工房データベース
- 68 生活工房のフライヤー
- 72 協力先一覧

EXHIBITION

WORKSHOP

SEMINAR

LOCAL
COMMUNITY

生活工房
アニ
ニ
ユ
ア
ル
レ
ポ
ー
ト
2
0
1
6

CONTENTS

生活工房の事業 Our Program

「展覧会」「ワークショップ」「セミナー」「地域と市民活動」の4つの事業を主として生活工房は運営されています。

Lifestyle Design Center provides four main figures of programs: Exhibition, Workshop, Seminar and Local Community.

EXHIBITION

展覧会

– 新たな発見が暮らしを彩る –

生活工房ギャラリーやワークショップルームでは、デザインやクラフト、異文化など多角的なテーマで展示を実施しています。

We are pioneering program of creative world of various designs, arts & crafts and intercultural experience into everyday life which will offer new and different view and value to share.



WORKSHOP

ワークショップ

– 多彩なモノづくりを楽しむ –

参加者が手や体を動かしながら「考え」「つくる」ワークショップでは、子供から大人までが楽しめる多彩なプログラムを実施しています。

Our design and creativity workshops for all ages offer fun and inspiring time to experience.



SEMINAR

セミナー

– 社会を知る、学びを楽しむ –

専門家やクリエイターを招き、暮らしや文化に関する生きた言葉に触れるさまざまな講演やトークイベントを実施しています。

Wide-ranging program of seminars and events for adults brings the academic field and creative world of design into our everyday life.



LOCAL COMMUNITY

地域と市民活動

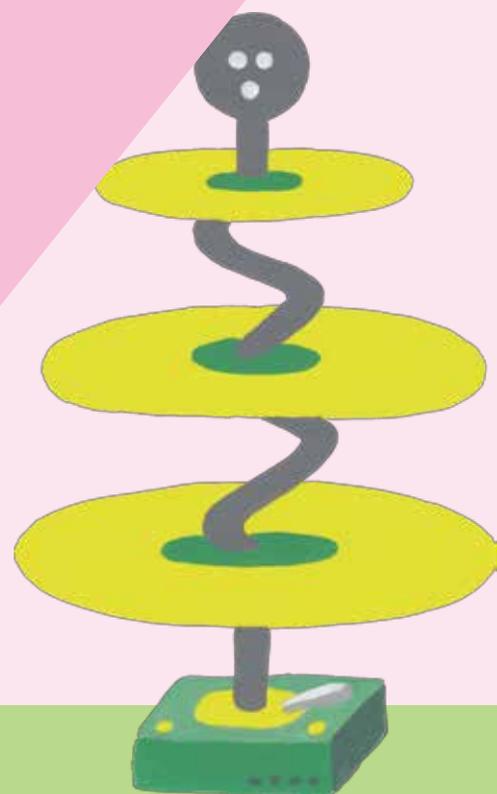
– 地域とつながる –

地域の活動と交流を支援し、多様な価値観や共感の輪を広げ、ネットワークを構築し豊かな地域づくりのお手伝いをしています。

Operating activity space and supporting programs for non-profit organizations, we encourage local citizens' networking with various people and exchange ideas for developing sustainable society.



展覧会



EXHIBITION



始末をかくエキシビジョン「生活はふるさとのように上演されている」 1幕より
《のろしを上げる：位置を示す》2月11日、三軒茶屋小学校にて

いぬと、ねこと、わたしの防災 いっしょに逃げてもいいのかな？展



災害から3日間のシミュレーション(奥)と、クリエイターの提案(手前)



防災グッズだけでなく、物流を利用するという新しい仕組みの提案も



トークイベントでは、会場からも積極的な質問が相次いだ



まいごポスターを作るワークショップ。決め手は日ごろからの観察眼

開催日時:2016年4月23日(土)~5月22日(日) 9:00~20:00 会場:生活工房ギャラリー 来場人数:7,966名 企画制作:Lucy + K/LEONIMAL BOSAI 特別協力:NPO法人ANICE 協力:世田谷獣医師会、昭和女子大学大学院生活機構研究科心理学専攻清水裕研究室 出展:山本和豊(dessence)、江口理架(29design)、福元成武(TANK)、小林恭+マナ(設計事務所ima)、長谷川晃一(ZAPPALLAS) アートディレクション・デザイン:高橋剛 イラストレーション:七字由布 編集協力:小林祐子(レモンと実験室)

関連企画

トークセッション「もしものために、必要なもの」
開催日時:5月7日(土)14:00~15:30 会場:ワークショップルームA トーク:平井潤子(NPO法人ANICE)×本展参加クリエイター 参加人数:100名 参加費:無料

まいごポスター・ワークショップ
開催日時:5月21日(土)14:00~16:00 会場:ワークショップルームB 講師:KIGI(植原亮輔/渡邊良重) 参加人数:20名 参加費:500円

災害時、飼っているペットと一緒に避難場所に逃げることを意味する、「同行避難」という言葉。国としては同行避難を推奨しているが、地域によって現状は異なっている。自分の住んでいる場所では、本当に、「いっしょに逃げてもいいのかな？」

そのわかりやすさ、親しみやすさが反響を呼び、展示内容を原案に書籍化されたほか、渋谷区・新宿区などの都内だけでなく、千葉県・岡山県・広島県 熊本県でも巡回展が開催された。

みんなで生き抜くために、
いまできることを考える

「30代女性の声」時代に合った問題提起。準備が大切であることを実感した。
「Twitter」現代社会では人間と同様、ペットも社会的存在であることがわかる。

MADE IN OCCUPIED JAPAN 1947-1952 海を渡った陶磁器展



陶磁器の製造法や産地の歴史も紹介

撮影:佐藤基(ほかすべて)



繊細な指先やレース



「Occupied Japan」の刻印の指示書など貴重な資料も展示



陶磁器のデザインは時代の鏡。万国博覧会のような賑やか



開催日時:2016年3月26日(土)~4月17日(日)9:00~20:00 会場:生活工房ギャラリー 来場人数:3,676名 協力:田中荘子、米国オキュバインド・ジャパンプラブ、瀬戸ノベルティ文化保存研究会、一般財団法人名古屋陶磁器会館、吉原ゆう子

関連企画

トークイベント「海を渡った陶磁器と戦後70年」
開催日時:4月10日(日)14:00~15:30 会場:ワークショップルームA 講師:田中荘子(米国オキュバインド・ジャパンプラブ代表) 参加人数:55名 参加費:300円

第二次世界大戦に敗戦し、連合国の占領下にあった日本。民間貿易が再開された昭和22年から27年(1947~1952)にかけての5年間は、輸出品に、「Made in Occupied Japan(占領下の日本製)」の刻印が義務づけられた。本展では、田中荘子氏(米国オキュバインド・ジャパンプラブ代表)のコレクションから、名古屋・瀬戸・有田などの産地で製造・輸出された陶磁器約200点を里帰り展示した。

チーフにした可哀しみあふれる塩・コシヨウ入れや小物入れなど、その魅力は、バリエーションの豊かさである。当時の人々とはとにかく、モノをつくらせては売ること、外貨を稼ぎ、自分たちの生活を再興しようとした。愛らしい陶磁器には、戦後日本の熱気も込められている。日本が占領下にあったという歴史さえ忘れ去られて今、「Occupied Japan」が刻印された品々は、私たちに日本の貴重な近代史を教えてくれた。

愛らしい陶磁器人形たちが里帰り

「60代女性の声」戦後に陶磁器の繊細な人形、飾り物があったことは驚きでした。
「Twitter」大量生産なんだけど、機械的になりきれてないところが好き。

日本のポータブル・レコード・プレイヤー展



猿山をイメージした展示造作。双眼鏡で遠くの展示物を見る仕組みも楽しい 撮影:高見知香

高度成長期、 日常の片隅にあったプレイヤーたち

1960〜80年代にかけてのレコード全盛期、日本人の多くが聴き親しんだのは、まるでおもちゃのようなポータブル・レコード・プレイヤーだった。市井の人々が音楽を楽しむ機器として、作り捨てのように大量生産され、時代とともに使い捨てられてきた、時代の徒花のような製品。しかし現代の眼で見ると、小さなハコにいろいろな機能を詰め込むことで、デザイン的にも面白く、フォルムだけでも楽しめるような製品も多い。オーディオメーカーだけでなく、電気メー

カー・おもちゃメーカーや、時には重工業の会社まで、幅広い業種が手がけた手軽なレコード・プレイヤーには、高度成長期の日本人のさまざまなアイデアやデザイン性が活かされている。本展ではプレイヤー100台以上を持ち主である高円寺・円盤の田口史人氏による解説とともに紹介。その展示方法や、100台のプレイヤーと100台のキーボードによるライブパフォーマンスも大きな反響を呼んだ。

開催日時:2016年7月30日(土)〜8月28日(日)
9:00〜20:00 会場:生活工房ギャラリー 来場人数:8,120名 企画制作・ディレクション:田口史人(円盤/リク舎)、軸原ヨウスケ(COCHAE) 会場設計:今井隆 映像制作:高見知香、村岡充

関連企画
出張円盤レコード寄席
開催日時:7月31日(日)15:00〜16:30 会場:ワークショップルームB トーク:田口史人(円盤/リク舎) 対象:中学生以上 参加人数:29名 参加費:1,000円

ASUNA+田口史人パフォーマンス「100 Keyboards + 100 Portable Record Players」
開催日時:8月14日(日)15:00〜18:00 会場:ワークショップルームB 出演:ASUNA(音楽家)+田口史人(円盤/リク舎) 対象:未就学児不可 参加人数:57名 参加費:1,500円

「40代女性の声」街の一角の、日常と音楽がひとつながりになった空間。素敵です。
「Twitter」デザインや機能の充実ぶりに昭和のメーカーのパワーを感じます。

DAYS JAPAN 写真展 2016 地球の上に生きる世界の未来をつくるために



写真展 会場



広河隆一トークイベント「ジャーナリストの視点から」



「ヨーロッパを目指す難民たち」 撮影:セルゲイ・ボノマレフ

世界は未だ混沌のまま。 同じ人類として何ができるのだろうか

毎日、テレビや新聞でも世界が直面している厳しい現実が報道されている。今年も生活工房では、DAYS JAPAN が主催する「第12回DAYS国際フォトジャーナリズム大賞」受賞作品展を開催した。国内外のフォトジャーナリストの写真には、理不尽さにもがき苦しみながら、人間の尊厳のために叫び続ける人々の姿があった。そこには私たちの認識を超えた世界の厳しい現実が写し出されていた。

中からあった。戦争や紛争、貧困、飢餓、児童労働や環境汚染、人間のために犠牲となる動物たち。これらは私たちと決して無関係ではない、紛れもない事実。特に「紛争と難民」は世界の大きな課題であり、私たち日本人にも選択と踏み出す未来が問われている。世界と向き合うことの大切さと、人類が少しでも良い方向に進める一歩について、これからも写真展を通じて考えていきたい。

開催日時:2016年5月28日(土)〜6月19日(日)
11:00〜19:00(最終日は17:00まで、月曜休み)
会場:ワークショップルームB 来場人数:2,596名 共催:株式会社デイズジャパン 企画:株式会社世田谷社
関連展示「難民問題を考える」 会場:生活工房ギャラリー(同時開催)

関連企画
トークイベント 広河隆一「ジャーナリストの視点から」

開催日時:6月5日(日)14:00〜16:00 会場:ワークショップルームA トーク:広河隆一(フォトジャーナリスト、DAYS JAPAN 発行人) 参加人数:64名 参加費:500円

体験セミナー「アフガニスタンの今―一村の暮らしとおもてなしの文化」
開催日時:6月11日(土)14:00〜16:30 会場:ワークショップルームA 進行:加藤真希(認定NPO法人日本国際ボランティアセンター アフガニスタン事業担当) 協力:株式会社ユリーカ 参加人数:24名 参加費:1,000円

「30代女性の声」「私たちは知らない」ということも悲劇だと感じました。
「Twitter」大判プリントは迫力がある。普段の生活では見ることができない貴重な写真展。

7つの海と手しごと〈第7の海〉 北太平洋と北西海岸先住民のトーテム



トーテムの動物ごとに民族資料とその神話も展示 撮影:後藤洋平



トーテムポールはミニチュアでも存在感充分 撮影:後藤洋平



講演会では意外と新しいトーテムポールの歴史に驚く人も多かった



ワークショップでは世界一難しい織り物とされるチルクット織に挑戦

開催日時:2016年11月19日(土)~12月18日(日) 11:00~19:00
(月曜休み) 会場:ワークショップルームB/生活工房ギャラリー 来場人数:7,065名 特別協力:北海道立北方民族博物館 資料協力:公益財団法人横浜市緑の協会 金沢動物園、東京シネマ新社 後援:カナダ大使館、アメリカ大使館

関連企画

講演会「北米北太平洋岸の生活文化を探る—トーテム・ポールの起源と現在」

開催日時:11月26日(土)14:00~15:30 会場:ワークショップルームA 講師:岡田淳子(北海道立北方民族博物館館長/文化人類学者) 参加人数:50名 参加費:500円

ワークショップ「チルクット織のペンダント」

開催日時:12月10日(土)10:30~16:30(途中休憩あり) 会場:ワークショップルームA 講師:是恒さくら(アーティスト) 参加人数:20名 対象:高校生以上 参加費:2,500円(材料費込)

記録映像上映会「ハイダ族の儀式」

開催日時:12月3日(土)・17日(土)11:00~11:50/14:00~14:50/16:00~16:50(1日3回上映) 会場:ワークショップルームA 上映作品:「ハイダ族のトーテムポール」「ハイダ族のトーテムポール建立式」「ハイダ族のポトラッチとダンス」(いずれも国立民族学博物館製作/1978年/各13~14分) 参加人数:計65名 参加費:無料

かたちが紡ぐ、遠い祖先の物語

北米大陸・北西海岸地域の各集団では、氏族や家などの名称や紋章として「トーテム」が使われてきた。トーテムとは例えばワタリガラス、シヤチ、クマなど、集団の祖先と特別な関わりがあると信じられていた特定の動物や自然現象のことをいう。北西海岸の伝説では、すべての動物は人間と同様の存在である(動物の人)であるとされ、人間の姿になることもでき、また人間も自身のトーテムとする動物の姿になることができると考えられていた。

春から秋にかけて北西海岸の豊かな恵みを十分に蓄えた人々にとって、冬は儀式の季節。長い冬の午後には、しばしば焚き火を囲みながら、世界がまだ新しく、人間と動物が同じことを話していた頃の物語を語り合ったという。本展では、北海道立北方民族博物館所蔵の民族資料や版画など50点以上を展示したほか、100年近く前の北西海岸の映像や、トーテムにまつわる物語を多数紹介。現地

「80代女性の声」人間と自然の根源的な関係に触れ、ゾクゾクしました。

「Twitter」解説のトーテムにまつわる民話がおもしろい。それぞれのトーテムは力強く、また愛嬌たっぷり。天然素材のバスケットがステキ!

留学生研究発表会 JAPONDER 2016 獅子になる



記録映像と音声を使った実験的な展示を行った



グリゴレ氏の調査地である松森町津軽獅子舞の獅子頭を展示



グリゴレ氏と長谷川勇氏によるトークイベント



長谷川氏に演舞の一部を披露いただいた

留学生が獅子と出会った

JAPONDER(ジャポンダー)は、日本に暮らす留学生を通して、世界の最先端研究や社会的課題、生活文化を知る企画。2005年に地域住民と生活工房との協働でスタートし、これまで40か国以上の国、90名以上の留学生たちが参加した。今年取り上げるのは、ルーマニアからの留学生イリナ・グリゴレ氏の文化人類学の研究。グリゴレ氏は、北東北を中心に獅子舞・獅子踊りについて調査し、自らも獅子となって舞い、地域の中で実践的

な研究を行ってきた。本展では、研究内容をパネルで紹介したほか、調査の記録映像と音声を使った実験的な展示を行い、青森県弘前市松森町の獅子頭5体の実物も展示した。「獅子舞に触れることは、人間とは何かを問い続けることです。もっといえば、人間以上の超自然的な見えない世界を見る可能性が開かれることであり、心を豊かにすることです」というグリゴレ氏のメッセージは、私たちに、人間が人間として生きる意味を、深く問いかける。

開催日時:2016年10月7日(金)~11月13日(日) 9:00~20:00 会場:生活工房ギャラリー 来場人数:3,922名 協力:松森町津軽獅子舞保存会、諏訪淳一郎、菊地和博

関連企画

トークイベント「獅子をかこみ、獅子をかたる」
開催日時:11月12日(土)14:00~15:30 会場:市民活動支援コーナー 講師:イリナ・グリゴレ(東京大学大学院)、長谷川勇(松森町津軽獅子舞保存会) 参加人数:37名 参加費:300円

「50代男性の声」今日、展示を見て、アートと文化人類学がとても近いものであることに気がきました。

「Twitter」「人間はみんな身体で世界を体験します」という挨拶の「身体」という着目点に共感した。

始末をかくエキシビション 生活はふるさとのように上演されている



1幕の展示風景。全体で1つの作品となっている

撮影：松尾宇人

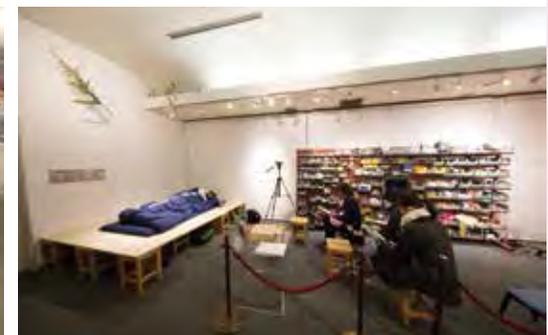


会期中にあげられた「のろし」



幕間ではフランス・パンさんによる朗読が行われた

撮影：松尾宇人



「生活工房で生活する」岸井大輔氏

撮影：松尾宇人

51日間の展示／上演

2017年に20年目を迎える生活工房で、演劇を中心としたアーティスト集団「始末をかく」が、3会期（1幕、幕間、2幕）にわたって「生活」をテーマに展示／上演を行った。

1幕では、日常生活を演劇の上演と見立てる提案、続く幕間では、「フランス・パンさんの部屋」が出現し、人間になった飼い犬を探す絵本とともに展示。2幕のプロログとなる「パウワウハウス」（「犬小屋」との関係も示唆するような、ユニークな場面転換となった）。

2幕からは、4階のワークショップブルームや26階の展望台、そして街中も舞台となつて開催。1幕での提案が実現した会場では、実際に「生活工房で生活する」パフォーマンスをはじめ、インスタレーションや演劇、ダンスなど、日常生活とひと続きに展示／上演が連日行われた。

劇作家 岸井大輔氏が今回のために書いた戯曲は、「生活はできていないとき求められる」という一文から始まる。ひとまず今回の上演は51日間で終わつたが、戯曲がある限り、これからも上演は続くだろう。

開催日時：1幕「生活は上演されている」2017年2月4日（土）～24日（金） 幕間「キッズイベント・パンと遊ぼう」「フランス・パンさんの部屋」2017年2月25日（土）～3月9日（木） 2幕「生活工房で生活する」3月10日（金）～26日（日） 9:00～20:00 会場：生活工房ギャラリー他 来場人数：17,948名 企画制作：始末をかくプロジェクトチーム（飯島剛哉・海野林太郎・遠藤麻衣・皆藤将・岸井大輔・木村玲奈・KOURYOU・小宮麻吏奈・武久絵里・立蔵葉子〔青年団〕・橋本匠・堀切梨奈子〔日本大学〕・村田紗樹）

関連企画

トーク&幻燈会「みちを遊ぶ、未知を楽しむー生活の近くを育む生活長者」

開催日時：2月5日（日）17:00～20:00 会場：セミナールームAB トーク：延藤安弘（建築家／NPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事）、鈴木一郎太（株式会社大と小とレフ取締役）、岸井大輔（劇作家／本展企画者） 来場人数：33名 参加費：500円

トーク「生活長者のスヌー内から始める社会性のタネ」

開催日時：2月6日（月）19:00～21:00 会場：セミナールームAB トーク：アサダワタル（文化活動家／アーティスト）、鈴木一郎太、岸井大輔 来場人数：27名 参加費：500円

〈30代女性の声〉いろんなこと的美しさを改めて感じました。

ワークショップ

WORKSHOP

夏の子どもワークショップ2016 夏休みをいれるバッグをつくろう！



4種類のメニューから2つを選んで装飾を施す



絵の具の滲みや偶然の模様を楽しもう



いろんな素材を組み合わせてみよう



かわいいモジャモジャモンスターバッグ



できあがったバッグを持って、どこに行く？

開催日時:2016年8月6日(土)、7日(日)各日12:30~13:30/14:00~15:00/15:15~16:15/16:30~17:30
会場:ワークショップルームAB 講師:NNNNY、木原佐知子(sunshine to you!)、金箔寺、多田玲子、ひがしちか(Coci la elle)、藤谷香子(快快)、monyomonyo 対象:小学1年生~中学生 参加人数:154名(+保護者190名) 参加費:1,000円

バッグにどんな夏の思い出を入れようかな？

夏休みの真っただ中に開催した、オリジナルバッグづくりのワークショップ。講師のデザイナーやアーティストたちが集めた材料は、カラフルでおしゃれであり、遊び心にあふれたものばかり。技法も、シルクスクリーンプリント、布用の絵の具を使ったペイント、スタンプ、アイロンプリント、グルーガンを使った異素材の接着、缶バッズづくりなど、さまざまなメニューから選んで、布のバッグに装飾をした。

生活工房ってどんなところ？何ができる場所なのだろう？子どもたちとその家族が、はじめて生活工房を訪れるきっかけとして、多くの人にデザインの楽しさを感じてもらえるように、対象を小学1年生以上とした。2日間で延べ150人以上の参加者が、賑やかなバッグを完成させた。日ごろ接点の少ない、デザイナーたちと子どもたちが出会い、教える、教えられるというにとどまらないコミュニケーションが生まれること、それが生活工房のワークショップの醍醐味である。

〈小学2年生女子保護者の声〉親に頼ることなく、自分なりの発想でカタチにできる姿がみられました。

夏の子どもワークショップ2016 14歳のワンピース



完成したテキスタイルデザインについて発表 撮影:ゆかい



撮影会はおびきりのおしゃれをして 撮影:ゆかい



報告展では等身大の写真を展示 撮影:ゆかい



男子限定のワークショップも開催

14歳100%のワンピースができました

14歳の夏。テキスタイル制作の3日間は、自分の気持ちとことん向き合う時間。1日目は、10の質問に答えてもらい、日々の思いや、どんなワンピースがつくりたいか、講師の飛田正浩氏と話し合うところからスタートした。

今の気持ちはどんな色？どんな形？移ろう気持ちのグラデーション、好き！嫌い！の強い気持ち、未来の夢、その心模様を洋服生地にデザインし、シルクスクリーンの技法でプリントした。出来上がった布は、専門の工場で作るワンピースに

仕立て、参加者のもとに届けられた。夏休みの終わりに再び集合し、作品を身にまとっての撮影会も行った。恥ずかしい気持ちも初めだけの大切な感情。写真家・池田晶紀氏と一緒に、撮る人・撮られる人の両方を体験しながら、14歳の美しい瞬間を記録した。

報告展示では、ワークショップの様子をワンピースの作品と写真、映像で紹介した。また関連イベントとして男子限定の洋服リメイクワークショップも開催した。

開催日時:2016年7月22日(金)、23日(土)、24日(日)10:00~17:00[制作]、8月20日(土)13:00~17:00[撮影会] 会場:ワークショップルームAB 講師:spoken words project 飛田正浩 対象:中学2年生女子 参加人数:12名(+保護者など14名) 参加費:4,000円 協力:池田晶紀(ゆかい)

関連企画

子どもワークショップ報告展「14歳のワンピース」
開催日時:2016年12月23日(金・祝)~2017年1月29日(日)9:00~20:00 会場:生活工房ギャラリー 来場人数:4,250名

ワークショップ「クリスマスだよ 男子限定！14歳のトレーナー」

開催日時:2016年12月23日(金・祝)13:00~14:00/14:30~15:30/16:00~17:00 会場:ワークショップA 講師:spoken words project 飛田正浩 対象:小学1年生~一般の男性 参加人数:23名 参加費:学生500円、一般1,000円

〈中学2年生女子の声〉デザイナーになりたいくなった。

〈Twitter〉かつて参加した女子と飛田さんとの対談を読んで、ひとりの中学生に与えた影響の大きさを感じた。

子どもワークショップ2016 分解ワークショップ パソコン&オーディオの仕組みとふしぎ!



ドライバーは上手く使える?



製品を一つずつ分解していく



分解しながら見つけた不思議を博士に質問



分解した部品



当日発行された「分解新聞」

開催日時:2016年11月6日(日)13:30~17:00 会場:
ワークショップルームAB 進行:金子金次(メ
ディア・アドバイザー) 対象:小学3年生以上の
親子2人1組 参加人数:25組 参加費:1,000円
協力:ソニー株式会社 ドキュメンテーション:
リキデザイン事務所

**分解で気づく、
生活の中に「不思議」がたくさんあること**

スイッチを押すと、当たり前前に起動するパソコン。そこには一つひとつの部品に込められた技術者の研究成果があることを私たちは普段あまり気にしてはいない。16年目となった分解ワークショップは、私たちの身近にある電化製品の仕組みについて、親子で分解しながら調べるワークショップである。メーカーの技術者たちが「分解博士」として参加者の作業をサポートする。

今回、分解に挑戦した製品は、ノートパソコンやオーディオ・ミニコンポなど。クリ

アに音楽を聴くための技術や、美しい映像を画面に映すための仕組みについて、自身の手でドライバーを回しながら「分解」を体験することで、実感を持って学ぶことができた。

細かい部品で構成された電子基盤は、一つひとつの材質、形、色に役割と意味があり、何一つ無駄なものはない。次世代を担う子どもたちが「モノづくり」に対する理解と愛着を深めるきっかけとなるのも、このワークショップの魅力である。

《小学3年生男子の声》楽しかった。いままで不思議だったことを解決できたので、いい日だった。

夏の子どもワークショップ2016 世田谷ロケハンアニメーション in NHK技研



ジャンプの瞬間をコマ撮りすると空中浮遊する映像がつかれる



アニメーションのストーリーはユーモア満載



出演者とスタッフの両方を体験しよう



プロの機材を使ってドキドキのスタジオ収録

開催日時:2016年8月24日(水)、25日(木)10:00~
17:00 会場・共催:NHK放送技術研究所 講師:小
柳貴衛(東京工芸大学助教) 対象:小学3年生~
中学生 参加人数:45名(+保護者など45名) 参加
費:500円 協力:一般財団法人NHK放送研修セン
ター、東京工芸大学

関連企画
子どもワークショップ報告展「世田谷ロケハンア
ニメーション in NHK技研」

開催日時:2017年2月6日(月)~17日(金)平日9:30
~18:00土日祝休 会場:NHK放送技術研究所 技研
ギャラリー 来場者数:2,353名

ワークショップ みんなでぐるぐるアニメーション
in NHK技研

開催日時:2017年2月11日(土・祝)、12日(日)各
13:00~17:00 会場・共催:NHK放送技術研究所
講師:小柳貴衛(東京工芸大学助教) 対象:小学3
年生~中学生 参加人数:29名(+保護者など15
名) 参加費:500円

映像と放送の仕組み、どうなっているの?

世田谷区砧にあるNHK放送技術研究所を会場に、映像と放送の仕組みを体験するワークショップを開催した。

前半は、物や人を少しずつ動かしては1コマ1コマ撮影して映像をつくる、ピクシレーションの技法でアニメーションを制作。会場内外をロケハン(ロケーションハンティング)の略して場所を探し、ストーリーを考え、自分たちが出演者となり撮影する。時には1秒の映像をつくるために何十分もかかることも。映像を分解すると、1枚1枚の静止画になること、何気なく見ているアニメーションには、

多くの時間と技術が詰まっていることを体感した。

後半は、放送スタジオで番組収録。本番前の静寂、フロアディレクターの開始の合図を待つドキドキ、コメントが飛び出したり……。実体験と、プロの緊張感が子どもたちの潜在力やチームワークを引き出すことを目の当りにする現場であった。

最後には保護者や家族を招いて、笑いあふれる完成上映会も行った。

《小学3年生男子の声》テレビの裏側を見られて良かった。スタッフやアナウンサーの大変さが分かって良かった。

電気だけで走るパーソナルモビリティを組立てよう！

これからの地域社会には、安全性と、より便利で快適な移動＝モビリティを可能にする新しいパーソナルな交通手段が求められている。

この講座では、地球環境・エネルギーの問題をはじめ、世界中に広がるパーソナルモビリティの事例を参考にしながら、次世代に向けた新しい交通について考えた。

今回教材として提案された都市型の新しいモビリティは、企画を進行する日本EVクラブが設計制作した前二輪後一輪の電動三輪車E3。みんなでE3や電気カーゴE-RKを組み立てながら、その仕組みと、未来に向けた次世代車の可能性について体験学習した。

中学生次世代車教室2017



新型プリウスPHVと記念撮影

開催日時：2017年3月12日（日）、19日（日）11:00～16:00、26日（日）10:00～17:00 会場：東京都立総合工科高等学校（12、19日）、トヨタ東京自動車大学校（26日） 対象：世田谷区在住、在学の中学1～3年生 参加費：3,500円 参加人数：13名 共催：東京都立総合工科高等学校、トヨタ東京自動車大学校 協賛：トヨタ自動車株式会社 企画進行：一般社団法人日本EVクラブ

《中学1年生男子の声》電気自動車ももっと当たり前になるといい。

《40代女性の声》楽しかった。いつもは購入だけで、手づくりする発想すらなかった。

新年を祝う お正月飾りづくり ワークショップ



藁を手にして一つひとつ丁寧に作業する

ゆく年への感謝と、新しい年への願いを込めて

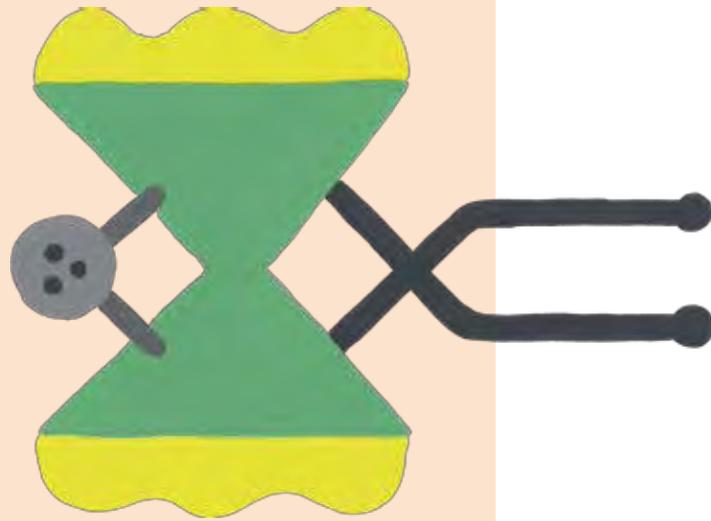
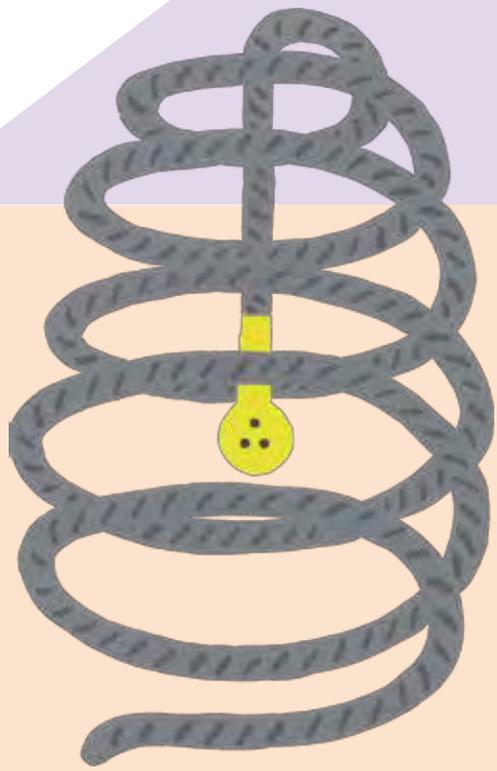
新たな年を迎える節目に、新しい福を願いながら、自分の手で注連縄の正月飾りを制作するワークショップ。

私たち日本人にとって「お正月行事」は特別な意味をもつ。日々の暮らしで出会う人たちのつながりや感謝の気持ち、文化の面でも日本人らしさを強く意識する時期でもある。ワークショップでは、伝統的な手法で稲藁を編んで縄づくりを行い、それぞれの思いを自身のデザインに込めてオリジナルの正月飾りに仕上げた。一年を振り返りながら、正月飾りで新年の準備を楽しむのも、年の瀬の有意義な過ごし方である。

開催日時：2016年12月28日（水）10:00～12:00 / 14:30～16:30
会場：ワークショップルームA 対象：高校生以上 参加費：1,500円 参加人数：51名 講師：SANADA Studio

セミナー

SEMINAR



NPO・市民活動のためのステップ・アップ講座 組織づくりのためのヒント／コツを学ぼう!!



第1回「NPOとお金」。熱心に聞き入る参加者たち

第1回「NPOとお金」
開催日時：2016年12月13日（火）19:00～21:30 講師：堤大介（株式会社PubliCo コンサルタント）
参加人数：23名

第2回「NPOと人材育成」
開催日時：2016年12月20日（火）19:00～21:30 講師：山元圭太（株式会社PubliCo 代表取締役COO）
参加人数：15名

第3回「ロジックモデル（課題解決の設計図）を立ててみよう!!」
開催日時：2017年3月7日（火）19:00～21:30 講師：長浜洋二（株式会社PubliCo 代表取締役CEO）
参加人数：18名

第4回「広報戦略（マーケティング）を考えてみよう!!」
開催日時：2017年3月21日（火）19:00～21:30 講師：長浜洋二（株式会社PubliCo 代表取締役CEO）
参加人数：28名

会場：セミナールームAB 参加費：各回1,000円
共催：世田谷区 生活文化部 市民活動・生涯現役推進課（第1回、第2回） 企画：株式会社世田谷社

安定的・自立的な組織づくりのために

NPO・市民活動団体の安定的・自立的な活動に向けて、多くの団体が共通して抱える運営上の課題を、事例やノウハウを交えて紹介しながら、より良い組織づくりに必要な基礎知識について理解を深めることを目的にした講座である。

世田谷区内には、地域社会のつながりや専門性を活かして社会課題の解決に取り組むNPO法人が500を越えているほか、非常に多くの市民活動団体が活動している。その活動は地域のコミュニティの充実を図り、地域の中で住民同士の絆を深

め、生活者が抱える課題の解決に向き合う重要な役割を担っている。では、市民活動として成果を生みだしながら、安定的・自立的に組織を運営していくために大切なことは何だろうか？

本講座では、それぞれの団体の特徴や性格に合った方法を理解しながら、組織の課題、やるべきことを明確にし、常に組織内で新たな視点や気づきを共有することが、より良い組織づくりのために重要であることを学んだ。

〈50代女性の声〉マーケティングの取り入れ方を具体的に知ることができた。

生活工房 × イシス編集学校 情報編集力連続講座



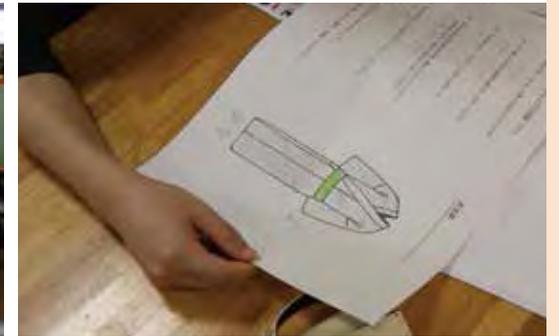
「わかるとわかる 情報編集力連続講座」



編集力とはどんなもの？



第3回会場 イシス編集学校「本楼」



「着物 編集ワークショップ」

多様な社会を「編集」する力

「インタースコア」とは、いろいろな分野をつなぎ、新しい見方（スコア）や関係を作り出す共創時代のキーワード。現代社会では、多様化する「情報」どの上手な付き合い方が、新しい価値観やライフスタイルを拓いていくためにも重要な課題である。

「情報編集力」とは、情報をいかに多様に収集して、どのように組み合わせ、新しい意味をつくるか、どうすれば独創的な発想が生まれ、より相手に伝わる表現を見出せるかを考えること。本講座では、イシ

ス編集学校で実践されている基本的な情報編集のプロセスの一端を体験しながら、全3回のワークショップで学んだ。

また、男性のための「着物 編集ワークショップ」を開催。男性には縁遠く感じてしまう日本の服飾「着物」について理解を深めた。帯、足袋、羽織など、それぞれを「情報」と捉えて、自分らしい着こなし方を「編集」で探ることで、自分でも思いがけない「好き」「好み」に出会える、とても興味深い内容となった。

先どり！インタースコア・ワークショップ
わかるとわかる「情報編集力」連続講座
開催日時：2016年6月12日（日）、25日（土）、7月3日（日）14:00～16:30 全3回完結 会場：セミナールームAB（第1・2回）／イシス編集学校「本楼」（第3回）
参加人数：37名 参加費：5,000円（全3回分）
共催：イシス編集学校

男性のための 自分の「好き」を着こなす 着物 編集ワークショップ
開催日時：2016年9月25日（日）、10月2日（日）10:00～12:30 全2回完結 会場：ワークショップルームA 対象：男性（高校生以上の方）
参加人数：11名 参加費：4,000円（全2回分）
共催：イシス編集学校

インタースコア・ワークショップ わかるとわかる「情報編集力」連続講座 Vol.2
開催日時：2017年2月12日（日）、25日（土）、3月5日（日）14:00～16:30 全3回完結 会場：セミナールームAB（第1・2回）／イシス編集学校「本楼」（第3回）
参加人数：27名 参加費：5,000円（全3回分）
共催：イシス編集学校

〈40代男性の声〉思考トレーニングが出来て面白かった。

食べられるセミナー 夜と生活工房



塩はなぜしょっぱいの？



塩比べ、塩釜焼きなど、塩づくしの晩餐



肉が生き物だったことを感じながら食べよう



激変し続ける沖縄社会とブタの関係



塩釜を割るとあらわれたのは...

第一夜 夜と塩
開催日時:2017年2月24日(金)19:30~21:30 講師:
高梨浩樹(たばこと塩の博物館主任学芸員) 参加
人数:28名

第二夜 夜と肉
開催日時:2017年2月28日(火)19:30~21:30 講師:
比嘉理麻(沖縄国際大学講師) 参加人数:30名

会場:ワークショップルームA 参加費:4,000円
料理:風景と食設計室 ホー 協力:(株)吉実園、
高橋希望(HOPEFUL PIG)

夜に訊く、塩と肉のはなし

休館日をのぞき、生活工房は毎晩夜10時
まで開館している。そんな生活工房の夜
を楽しんでもらうためのセミナー。平日
の夜、専門家による講義に学び、風景と
食設計室ホーによる料理を食した。夜の
暗がりの中で、日常の中でありふれて見
えなくなっているものを、目を凝らして
見てみよう。

第一夜は「夜と塩」。食べ物の中で唯一
生き物ではない塩。約40億年前、海に生
まれた原始の生命は細胞に塩を内包
し、私たち人間にとっても生命維持に

欠かせないものだ。当たり前前に食卓にあ
る塩は、重要な存在であることを知った。
第二夜は「夜と肉」。「ブタは声まで食べ
られる」と言われるほど、耳・内臓・足と、
全てを食べつくす沖縄の豚食文化を例
に、家畜と肉食をともにしていた生活に
ついて、また産業化によって生まれた物
理的・精神的距離と大量消費との矛盾な
ど、人とブタにまつわる話を聞いた。
そして美しく趣向を凝らした料理を囲
み、会話の中から新たな発見・問いが生
まれる夜となった。

〈40代女性の声〉個人的に塩の新しい姿と自分との関係を知ってしまった感じです。

うたの記憶と出会うとき —クレオール・ニッポンの旅先から



左から、石倉敏明氏、松田美緒氏、川瀬慈氏



『クレオール・ニッポン
うたの記憶を旅する』

開催日時:2017年2月12日(日)15:00~17:00 会場:
ワークショップルームB 鼎談:松田美緒(音楽
家)、石倉敏明(人類学者、秋田公立美術大学講
師)、川瀬慈(映像人類学者、国立民族学博物館助
教) 参加人数:65名 参加費:1,000円 特別協
力:株式会社アルテスパブリッシング

〈50代女性の声〉普段聞けない話をたっぷり聞けました。

「うた」で旅する時間

2020年東京オリンピックの開催を
ひかえ、あらためて日本人について考え
る機会も増えている。一言で「日本人」と
いっても、明治元年にはじまるハワイへ
の移民、昭和43年に返還された小笠原諸
島など、近代史を振り返るだけでも、多
様な日本人の暮らしを私たちは知るこ
とができるだろう。

松田美緒氏は、各地に伝わる「日本のう
た」を訪ねて、フィールドワークと現地で
のライブを中心に活動している「うたう
旅人」だ。2014年には、CDブック

『クレオール・ニッポン』を発表し、現在
も版を重ね、多くの共感を呼んでいる。
来年度、そんな活動を紹介する展覧会を
予定しているが、今回は2人の人類学者
を招いてイベントを開催した。生活
の中で口ずさまれてきた「うた」を考え
ることは、現在の私たちの生活を考える
ことにもなる。撮影したての徳島県祖谷
の「花取り歌」の映像から音楽の起源に
至るまで、「うた」をキーワードに幅広く
旅する時間となった。

日本語の豊かさを実感する

ふだん何気なく話している「ことば」。でも、声の出し方や聞き手に伝わる読み方を練習することで、たちまち豊かな世界が広がってくる。しかも、教材になるのは、選り抜きの日本語の作品。週に一回、三軒茶屋のセミナールームに通うことは、参加者にとってかけがえのない楽しみ

だっただようだ。締めくくりに行われた発表会は、文字通りのハレ舞台となった。

取り上げた作品
堀辰雄「風立ちぬ」「浄瑠璃寺の春」和辻哲郎「古寺巡礼」夏目漱石「夢十夜」「坊っちゃん」「三四郎」「こころ」「吾輩は猫である」「三浦哲郎」ユタともしぎな仲間たち「太宰治」富嶽百景「高村光太郎」智恵子抄「宮沢賢治」注文の多い料理店

朗読講座
豊かなことばの世界



発表会はドキドキのちハレバレ

開催日時:年4回(4月期、7月期、11月期、2月期) 各4講座(水曜午前・午後、木曜午後、金曜午後) 会場:セミナールームA 講師:一般財団法人NHK放送研修センター日本語センター 対象:一般 参加人数:732名 参加費:20,500円(4回分)、アーツカード会員は18,500円 共催:一般財団法人NHK放送研修センター日本語センター
朗読発表会 開催日時:2017年3月5日(日)13:30~16:30 会場:セミナールームAB 参加人数:83名 参加費:無料

「森・里・海の連環」による豊かな海づくり
レリーフジオラマ



循環する自然の姿を立体的に感じられる迫力の映像

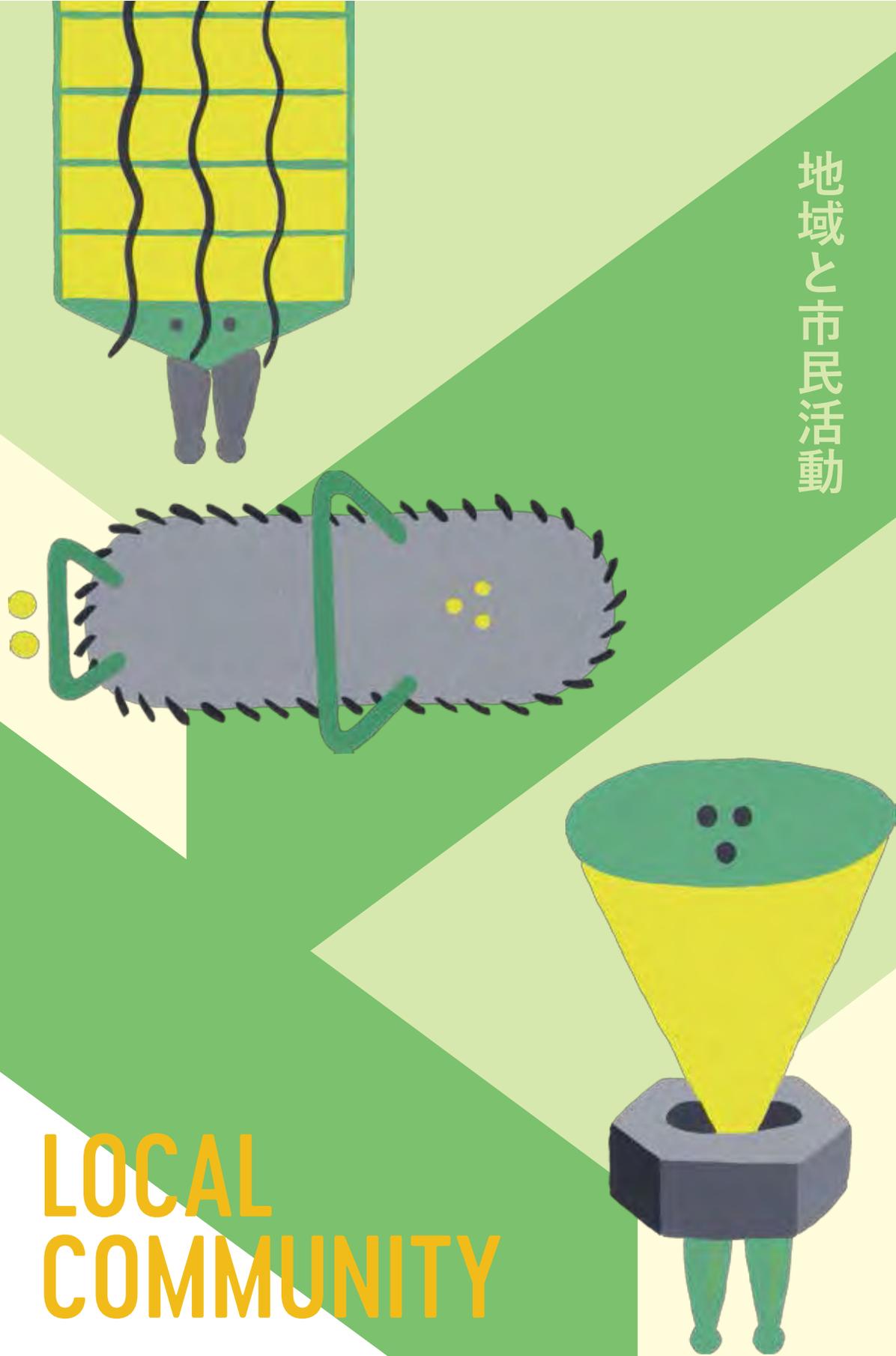
開催日時:2016年4月~2017年3月(上映日数117日) 会場:八角堂 来場人数:2,836名

自然はつながっている

約5分間、穏やかな音楽をバックに、美しい日本の自然を楽しむながら、自然の循環、人々の営みを学べる映像作品。上映が始まってから4年になるが、プロジェクトの「飛び出す」の手法を使った「飛び出す映像」の魅力は色あせない。キャロットタワーのマイナ

バーカード専用窓口の近くに位置していて、ぶらりご来場のお客さんが多いが、「近くに来たから」と言っていて、繰り返し見に来てくださる熱心なファンもいる。
みなさんも三茶にいらしたら、ぜひお立ち寄りを。

地域と市民活動



LOCAL
COMMUNITY

世田谷アートフリマ



アートフリマに遊びにきた(?)、「せたがやじん」の姿も



4階の展示ブースには、2日間で約140組のブースが並ぶ



気軽に参加できるワークショップ



ものづくりのプロセスに触れる実演&販売ブース

開催日時: [Vol.25] 2016年4月23日(土)、24日(日) 11:00~17:00 [Vol.26] 2016年9月17日(土)、18日(日) 11:00~17:00 会場: ワークショップルームAB、セミナールームAB、市民活動支援コーナー 来場人数: [Vol.25] 約4,000名 [Vol.26] 約5,000名 共催: 世田谷アートフリマプロジェクト 協力: 世田谷233、TSUTAYA三軒茶屋店

関連企画

世田谷アートフリマつながり展2016
開催日時: 9月4日(日)~25日(日) 9:00~20:00 会場: 生活工房ギャラリー 出展作家: ASUHA-明日葉-(写真)、Emi(キリハリエ)、小田ひで次(漫画)、佐々木朋哉(ジオラマ)、CISEAUX(フェルト)、Storm Machine Graphics(イラスト)、永井キオ(鉄アート)、なめくじソルトと百日咳(ファッション)、Bow Shaver(羊毛)、みつみみえりお(消しゴムはんこ) 来場人数: 3,000名

手づくりアートの「のみの市」

2003年から開催している、地域密着型イベント『世田谷アートフリマ(Art Fair Market)』アートの「のみの市」。オリジナルの作品を発表する場であり、「もの」を通して「世田谷」に関心を持つきっかけの場でもある。バラエティ豊かな出展ブースとならんで、地元のパンやワークショップも楽しめる生活工房の3フロアは、今年も大勢の人たちで賑わった。インターネット上で個人でも気軽に発表・販売ができる昨今だからこそ、世田谷

アートフリマは、「作品」を介したコミュニケーションの場となることを大切にしている。いわゆるフリーマーケットとも異なる、オリジナルの「作品」を介したここの交流が、次の「ものづくり」を生み出す一歩になるのではないだろうか。また、「世田谷」という地域限定だからこそ、自分の暮らす街の魅力の再発見にもつながる。世田谷アートフリマは、そんなきっかけがたくさん生まれることを願って行われるイベントである。

《30代女性の声》さまざまなジャンルの作品が見られた。制作者と直接対話できた。

穴アーカイブ: an-archive



「三茶de大道芸」の休憩室で実施した街頭テレビ



鑑賞会では来場者にお話を聞きながら進行

撮影: 高田洋三



「せたがやアカカブの会」での1コマ



参加者が持参した映像に関するモノ

募集期間: 2016年4月1日(月)~7月31日(土) 提供フィルム数(提供人数): 39本(15名) 企画制作: remo[NPO法人記録と表現とメディアのための組織] 協力: 日本大学文理学部社会学科後藤範章研究室

関連企画

街頭テレビ 8ミリフィルム上映
開催日時: 10月15日(土)、16日(日) 12:00~17:00 会場: リソナ銀行三軒茶屋支店 大休憩室 来場人数: 250名 入場無料

8ミリフィルム鑑賞会vol.2一穴からみえる、ひと、くらし、世田谷

開催日時: 10月30日(日) 14:00~15:30 会場: ワークショップルームB 来場人数: 110名 入場無料

せたがやアカカブの会
開催日時: 6月5日(土) 15:00~16:30、7月13日(水)・8月3日(水)・9月7日(水)・11月9日(水)・12月7日(水)・1月18日(水)・2月15日(水)・3月8日(水) 19:00~20:30 会場: セミナールーム、ワークショップルーム 参加人数: 72名 参加費無料

昭和30~50年代にひろく普及した8ミリフィルム。現在、その多くが劣化・散逸の危機に瀕している。2015年春から始動した『穴アーカイブ: an-archive』は、市民から提供されたフィルムをアーカイブしていくプロジェクトである。今年度は、15名の方から提供された39本のフィルムをデジタル化した。昭和29年の雪景色の経堂や銀座、廃線する直前の玉電の記録など、当時を知るための貴重な映像資料だ。今回デジタル化した映像の一部は、昨年に引き続き2回目となる

公開鑑賞会でお披露目し、100名を超える来場者で賑わった。また、すでにデジタル化した映像をじっくり鑑賞していく「せたがやアカカブの会」も本格的に始まった。映像には残っていない記録の不在(「穴」)を、参加者と一緒に回想・想像し、気になったことを調べて毎回持ち寄っている。アーカイブを楽しむながら、アーカイブをつくる本活動は、フィルム募集とあわせて来年度以降も開催していく予定だ。

記録の穴から探る、当時の世田谷

《60代男性の声》個人で撮られたものが時代を経て、各々の思い出と重なり、共有できた。

おはなしいっぱい



開演を待ちわびる来場者



特別ゲスト・ふるさと北上民話研究会



パネルシアターで上演。見入る子どもたち



同時開催の島津和子絵本原画展

開催日時：2016年8月17日(水)11:30～15:00、18日(木)11:00～15:00、19日(金)11:00～15:00 会場：ワークショップルームAB 出演：20グループ 来場人数：1,560名 共催：世田谷おはなしネットワーク 協力：世田谷区立中央図書館、世田谷区立児童館

関連企画

講演会「まどさんという宇宙～104の年輪をもつ人」
開催日時：6月21日(火)10:30～12:00 会場：セミナールームAB 講師：松田素子(編集者) 参加人数：115名 資料代：100円

講演会「隣の爺の昔話」

開催日時：11月17日(木)10:00～12:00 会場：セミナールームAB 講師：大島廣志(民話研究者) 参加人数：121名 資料代：100円

「世田谷おはなしネットワーク」と共催する本企画では、毎年、3日間のおはなし会『おはなしいっぱい』と2回の講演会を開催している。
おはなし会は、構成、出演、準備のすべてを参加者が行う市民の手作り企画として回を重ね、今年度で16回目を迎えた。幼児から小学生まで対象年齢を分けた幅広いプログラム構成で、紙芝居、すばなし、手あそび、わらべ唄、パネルシアターなどの多彩な上演を行い、特別ゲストも招く。今回は、岩手県北上・西和賀地方で語り継が

区内で活動する、おはなしの会が大集合！

「世田谷おはなしネットワーク」と共催する本企画では、毎年、3日間のおはなし会『おはなしいっぱい』と2回の講演会を開催している。
おはなし会は、構成、出演、準備のすべてを参加者が行う市民の手作り企画として回を重ね、今年度で16回目を迎えた。幼児から小学生まで対象年齢を分けた幅広いプログラム構成で、紙芝居、すばなし、手あそび、わらべ唄、パネルシアターなどの多彩な上演を行い、特別ゲストも招く。今回は、岩手県北上・西和賀地方で語り継が

れてきた民話を伝承する「ふるさと北上民話研究会」を招き、地域を超えた交流が行われた。長年の活動で培われた運営ノウハウを活かしながら、夏の恒例行事として出演者、来場者とも、多くの区民に親しまれている。
講演会では、絵本編集者や民話研究家のお話をうかがい、演者としての造詣を深めた。
*1997年活動開始。世田谷区内で活動する複数のおはなしの会が連携し、図書館などで活動中。現在、60のグループ・個人会員から成る。

《40代女性の声》小学2年生の息子もとても楽しんでいました。英語の絵本の朗読がとても良かったです。

みっける365日 アーティストと探す「人生の1%」



説明会では各アーティストのビデオレターも上映



初回は願書をもとに、ゼミ毎のテーマも検討



ドローイングのような書き初めの数々



参加できなかったゼミ生のための補講も開催

撮影期間：2017年1月1日～12月31日
成果発表：2018年2～3月(予定)
サポート・アーティスト：北川貴好(美術家/「みっける写真道場!!」師範)、青山悟(美術家)、キュンチョメ(アートユニット)、タノタイガ(美術家) 対象：世田谷区に縁があり、スマートフォンまたはデジタルカメラをお持ちの方 参加人数：25名 企画制作：みっける写真道場!!

関連企画

「みっける365日」参加者募集説明会!
開催日時：12月23日(金・祝)14:00～15:30/12月27日(火)19:00～20:30 会場：ワークショップルームB 講師：北川貴好 参加人数：28名

初回みっける「ゼミ分け発表」+「書き初め」
開催日時：1月14日(土)13:00～15:00 会場：ワークショップルームA 講師：北川貴好、青山悟、キュンチョメ、タノタイガ 参加人数：21名

第2回みっけるゼミ
開催日時：3月4日(土)13:00～16:00 会場：ワークショップルームA 講師：北川貴好、青山悟、キュンチョメ、タノタイガ 参加人数：17名

本プロジェクトの下敷きとなつて美術家・北川貴好氏が展開してきた「みっける写真道場!!」は、もともと写真を使った遊びから生まれた1日完結のワークショップだ。1日1000枚を目標に、参加者の視点で撮影した写真を高速スライドショーで発表。写真を通して、街との関わり方を更新していくユニークなプログラムである。
「みっける365日」は、そんな1日完結だったワークショップを、1年間に拡張して実施する実験的な試みだ。北川氏の

撮る、見る、繋ぐ、1年間。

ほか、個性豊かな3組の美術家が参加者(「ゼミ生」と関わりながら併走。1年間で撮りためた写真をもとに作品を制作し、2018年春の展覧会で発表を予定している。
今年度は、まず参加者募集のための説明会を開催。その後、願書を提出して参加表明した25名のゼミ生らと、書き初めやゼミ内での報告を行った。様々な動機・経歴の参加者が、1年後に何を「みっける」のか、これからの楽しみなキックオフイベントとなった。

《20代男性の声》日々(人生)を見つめる、見つけるいい企画

市民活動支援コーナー



市民団体によるパソコン講習会



コーナーのエントランス



パオフェスタ2016



～市民活動のチカラ～防災ワークショップ

幅広い分野の市民活動団体をサポート!!

市民活動支援コーナーは、世田谷区内でさまざまな活動を行っている市民活動団体が登録し利用する「活動の場」である。日常的な打ち合わせに活用できるほか、チラシやポスターの印刷スペースがあり、幅広い団体の活動情報も掲示している。今年も登録団体が制作した作品展示とともに、運営スタッフが同コーナーで活動する団体取材して日記風に紹介する展覧会「市民活動支援コーナーの日々展2016」、秋の恒例となった「パオフェスタ2016」を開催。イベントを通じて

各団体が工夫を凝らした活動報告や展示を行い、団体同士が知り合える交流の場としても好評である。また「市民活動のチカラ」防災ワークショップ」では、市民活動団体としての視点から、災害時の行動や避難所などにおける生活について、講師とともにシミュレーションを行った。団体として自分たちに可能な役割や行動範囲を確認し、地域でつなごうとする大切さ、専門性を活かした支援活動のあり方を再認識する機会となった。

場所：生活工房3F 利用時間：9:00～21:00（月曜休館） 委託先：特定非営利活動法人国際ボランティア協会（IVUSA） 来場人数：22,041名

関連企画

市民活動支援コーナーの日々展2016
開催日時：6月25日（土）～7月24日（日）9:00～20:00
会場：生活工房ギャラリー 来場人数：2,164名

～市民活動のチカラ～防災ワークショップ
開催日時：10月1日（土）14:00～17:00 会場：ワークショップルームA 講師：宮崎猛志（IVUSA危機対応研究所所長） 参加費：500円 参加人数：27名

パオフェスタ2016 市民活動体験喫茶パオ
開催日時：10月15日（土）、16日（日）11:00～18:00
会場：市民活動支援コーナー 来場人数：803名

《60代男性の声》暮らす地域のことだから、もっと参加しようと思いました。

世田谷市民活動支援会議



勉強会「今後の中間支援組織のあり方」

他の構成団体：世田谷区生活文化部市民活動・生涯現役推進課、特定非営利活動法人世田谷NPO法人協議会、社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会、一般財団法人世田谷トラストまちづくり、社会福祉法人世田谷ボランティア協会、特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会、特定非営利活動法人NPO昭和

世田谷の市民活動、応援します。

世田谷は、市民活動が盛んだ。NPOやボランティア団体など、さまざまなグループが活動している。世田谷市民活動支援会議は、「よい地域社会を作るための市民活動」を支えるためのネットワークである世田谷区と、施設や助成金の提供など、多様な形で活動を支える中間支援団体で構成されている。隔月で連絡会議を開くとともに、今年度はプロボノワーカーとNPOをつなぐ活動をしている認定NPO法人サービスグラントの代表を招いての勉強会を行い、今後の中間支援組織のあり方について意見を交わした。

国際交流 in せたがや2017



各国ブースのスタッフが笑顔の競演

開催日時：2017年2月18日（土）13:00～16:00 会場：ワークショップルームAB 参加費：1,000円 来場人数：282名
共催：世田谷海外研修者の会

世田谷区民による国際交流イベントを開催!

生活工房では、区民団体が行う国際交流事業を共催、サポートしている。今年で第25回目となる「国際交流 in せたがや」は、区民手づくりの国際交流事業として、在日外国人との文化交流の場をテーマに行われている。各国の大使館大使、書記官なども来賓に迎え、会場は沢山の方々に賑わいをみせた。世界各国のPRブースでは、自国の文化の紹介や、特産品の販売が行われて来場者の好評を得た。また、日本舞踊の実演があったほか、お茶や和服の着付けなど日本文化の体験コーナーも人気で、区民と在日外国人の交流を深めるイベントとなった。

プレイバック2016

最後に、生活工房の事業企画担当者3名が2016年度をダイジェストで振り返ります。さまざまな切り口で実施している事業は、点々としているようで、実は線が繋がっていたりもします。そんなミッシングリンクを探すような、断片を集めたつまみ食い鼎談です。

春(4月～6月)

穴アーカイブ
世田谷の8ミリフィルムにさぐる

A 『穴アーカイブ』から生まれた「セタがやアカカブの会」は2016年の春から始まりましたが、定期的に集まりがあつて、順調に育っているようですね。

T 下北沢の昔の写真を大量に発掘してきてくれるメンバーもいて、世田谷の地層を耕している感じがします。

S YouTubeにアクセスすればすぐに映像を視聴、共有できる時代ですが、

この時間・この場所に来ないと見られないという状況で、いろんな人と喋りながら見る機会をつくりたいと思って始めました。今はひとりで映像を見る体験が主流になっていますが、かつてはテレビを囲むように見えていましたよね。8ミリフィルムの映像を鑑賞した「アカカブの会」の人たちの当時の記憶や発見も含めて、来年度は展示会も行う予定です。

S 日本が占領下にあつたという話を

MADE IN OCCUPIED JAPAN
海を渡った陶磁器展

日本が占領下にあつたという話を

口にする機会は少ないですし、歴史を思い返す展示会だつたと思います。

A 日本は美しい精巧なものをつくるイメージですが、人形を見ると意外と拙い部分も見えてきて、でもそれがまた魅力で。戦後のどさくさの中、意匠模倣の問題もあつたようですが、磁器で有名なドイツのマイセンも、有田の柿右衛門様式の影響を受けていたり、歴史の中でモノやデザインが世界を巡り巡っていることに気がついた展示でした。

T あと、ステレオタイプな世界観がこの頃すであつたのが面白かつたですね。インド人はターバンを巻いていて、蛇を操っているとか(笑)。

に関心が出てきました。

T 一方で、ワークショップを申し込む前に完成形を気にされる保護者が多くなっているような気がしています。費用対効果というか、参加費に見合うものが出来るのかどうか……。

A そういう意味で考えると、生活家電を分解する「分解ワークショップ」は何もつからないですし、逆転の発想ですね。

日本のポータブル・レコード・プレイヤーズ展

S 展示方法がユニークでしたね。

T 猿山をイメージしてつくりました。大胆に置かれてるように見えて、実はきちんと年代順に配置されています。今回プレイヤーを貸して下さった田口史人さんの話で面白かつたのが、レコードプレイヤーも含め昔のものは、その時代の人の動きに合わせてつくられていて、モノに残された当時の人の所作を感じられるというお話。8ミリフィルムにしてもそうですが、今年度の事業に通じるテーマとして

夏(7月～9月)

夏の子どもワークショップ

A 「14歳のワンピース」が6年目で、アニメーションのワークショップが10年目。内容の精度が上がる一方で、最終的に何ができるか分からないワークショップ

スタッフA



子どもワークショップなどを担当。集めているものはギザ10。

スタッフS



「穴アーカイブ」「みっける365日」などを担当。集めているものは古いスクリーン。

スタッフT



「7つの海の手しごと」などを担当。集めているものは仮面。

生活工房 1年の流れ

春(4～6月)

3月26日(土)～4月17日(日)

MADE IN OCCUPIED JAPAN
海を渡った陶磁器展

4月23日(土)・24日(日)

世田谷アートフリマvol.25

4月23日(土)～5月22日(日)

いぬと、ねこと、わたしの防災「ごっしょに逃げてもいいのかな?」展

5月28日(土)～6月19日(日)

DAYS JAPAN写真展2016
地球の上に生きる

「世界の未来をつくるために」

6月5日(日)

穴アーカイブ

セタがやアカカブの会

6月12日(日)・25日(土)・7月3日(日)

先どり! インタースコアワークショップ
わかるとかわる「情報編集力」連続講座

6月21日(火)

世田谷おはなしネットワーク講演会
「まどさんという宇宙」104の年輪をもつ人

6月25日(土)～7月24日(日)

市民活動支援コーナーの日々展2016



は、モノを集めているようで、その時代の生活を集めていたり、記憶を集めていたりするような気がしました。

秋(10月~12月)

留学生研究発表会 JAPONDER2016

獅子になる

S 会期中に別の場所で獅子舞を見る機会があり、その後、展示の見方が変わった気がしました。自分の暮らしと展示内容に接点をつくれると、興味も変わってくると思いましたね。

A 獅子は百獣の王というイメージがありますが、天敵である害虫が牡丹の夜露を嫌うので、牡丹の下が唯一の安住の地なのだそうです。私自身の安住の地とは？ と考えることにもなりました。というのも、今は皆が癒やしや安らぎを求めている、彷徨える獅子だと思えたんです。獅子舞を考えることは伝統芸能だけでなく、現代社会を考えることだと思いました。

7つの海と手しごとvol.7
「北太平洋と北西海岸先住民のトータル」

T 東日本大震災の瓦礫がアメリカ北西海岸に1年後に流れ着いたというニュースがあり、そういうことで実感はしたくないですが、改めて海でつながっていることを知ることになりました。海の向こうの、隣人は何を感じて

どんな生活を送っているのかを覗き見てみようということから始まった展示で、今年度で完結しました。

A 2012年に展示をした言語学者・文化人類学者の西江雅之さんの異文化の話の思い出します。

T みんな異文化理解というけれど、アフリカの人が何を食べるという以前に、隣の家の人が何を食べているかを知っているの？ ということですね。

A 自分の皮膚の外はすべて異文化だ。

みつける365日

アーティストと探す「人生の1%」

「生活はふるさとのように上演されている」

S 生活工房が2017年で20年を迎えることもあり、ここがどのような場所かを問うような内容にもなればと考えました。それで、生活“そのもの”を考える内容を模索しました。衣食住を個別に考えることはできるのですが、“生活”というと漠然としてしまう。制作を依頼した劇作家の岸井大輔さんの戯曲も展示しましたが、その一節に「生活はできないとき求められる」という言葉がありました。今こうして暮らしながら生活について根本的に考える難しさを痛感しましたね。

T 「ふるさとのように」という部分は？

S この戯曲の続きに、“難民”というキーワードが出てきます。端的に言うところの意味で世田谷区民は“難民”なのではないかと考えることができます。先祖代々という方もいますが、転入出も多い。世田谷にふるさとをつくらうと、毎日を通して、演じている。それは落ち着くことでもあるし、保守化してしまいうことでもあり、両義的なのですが。

夏(7~9月)

7月13日(水)・8月3日(水)・9月7日(水)
穴アークライブ
せたがやアカカブの会

7月30日(土)~8月28日(日)

日本のポスター・レコード・プレイヤーズ展

7月22日(金)~24日(日)・8月20日(土)

夏の子どもワークショップ2016

「14歳のワンピース」

8月6日(土)・7日(日)

夏の子どもワークショップ2016

「夏休みをいれるバッグをつくらう！」

8月24日(水)・25日(木)

夏の子どもワークショップ2016

「世田谷ロケハンアニメーション in NHK 技研」

8月17日(水)・18日(木)・19日(金)

夏の子どもワークショップ2016

「おはなしいっぱい」

9月4日(日)~25日(日)

世田谷アートフリマ

つながり展2016

9月17日(土)・18日(日)

世田谷アートフリマ vol.26

9月25日(日)・10月2日(日)
男性のための自分の「好き」を着こなす
着物 編集ワークショップ

秋(10~12月)

10月1日(土)

市民活動のチカラ

防災ワークショップ

10月7日(金)~11月13日(日)

留学生研究発表会 JAPONDER2016

獅子になる

10月15日(土)・16日(日)

パオフェスタ2016

市民活動体験喫茶パオ

10月30日(日)

8ミリフィルム鑑賞会 vol.2

穴アークライブ

11月6日(日)

子どもワークショップ

「分解ワークショップ パソコン&オーディオの仕組みとふしぎ」

11月9日(水)・12月7日(水)

穴アークライブ

せたがやアカカブの会

11月19日(土)~12月18日(日)

7つの海と手しごとvol.7

「北太平洋と北西海岸先住民のトータル」



T 世田谷は住みたい街というバブルック・イメージもありますが、実際に越してくる人は、イメージした暮らしを演じているのではないかと、ということでしょうか。

A 下北沢みたいに文化的なイメージの出来上がっている街なら、下北っぽく振る舞って暮らすとか。

うたの記憶と出会うとき
クレオール・ニッポンの旅先から

S 2017年の夏に展覧会も開催するのですが、今年度は序章としてトークイベントを実施しました。

T ここで語られたことは、2015年の展覧会「ブナ帯☆ワンダーランド」で協力頂いた、〈食〉研究工房の林のり子さんにも通じていて、距離の離れた地域と地域のつながりを察知する勘のようなものが働き、それが実は確かだったりする。**ある土地の暮らしを、いかに自分の暮らしに引き寄せるかが、この「クレオール」**（広義においての移民）という視点で必要な気がしました。

S 排外主義的な言動がメディアでも

取り上げられる中で、日本人というのはどうい存在なのか、歌を通じて考えられたらと思っています。

食べられるセミナー
夜と生活工房

A 生活工房が22時まで開館しているので、夜の生活工房にも来てほしいと思います。考えました。テーマは「塩と肉」ですが、塩は私たちが食べているもので唯一生き物ではなく、肉は逆に生き物という認識が強い。そんな相反するものをテーマに、頭の中で「食べられる／食べられない」の境界を見直してみる。パックで売られている肉も生き物だったということ想像し、**自分自身も肉だ**ということに気づきかけになれば。

T 「うたの記憶」で語られたことなのですが、人類学者の川瀬慈さんが出会った北西海岸のインディアンは、早朝5時にドラムを叩いて先祖と交信をしていたそうなんです。一緒に寝泊まりしている人は迷惑したようですが、そんなことは気にせず先祖と語り合う。それは自然の循環に自分を戻す儀式で

もあるらしく、自分も肉であることを忘れてしまうのも、**今はその循環から離れてしまっている**のかもしれないね。

事業のもとにある思考

A 先日、俳優の渡辺えりさんが、自然物はすごく美しいけど、人間がつくったものもすごいということを通じて演劇が続いているというような話をしていて、それが妙に腑に落ちました。歳をとるにつれ、花鳥風月の美に気が付きますし、その造形美には敵わないとも思うけど、人間がものをつくるということの、その欲求や創造力に希望を持ち続けたいというか。

T コンピュータの台頭で人間自体の力が退化しているような気がしますし、コミュニケーションにおいても、メールやSNSが日常化していますが、人間との距離感が上手くとれない、会話が難しいということもある。とくに東日本大震災以降、私は人間として生きる力が高まるようなヒントを、生活工房の企画に入れ込むように意識しています。例えば自然の移り変わりを察知

できるだけで生きる力につながると思っています。

S そういう意味では、人間の生きる力というのは、生活で使える、役立つものという意味も含むと思いますが、その視点はすごくデザインの発想ですよね。僕自身も、生活工房が「使う場」あるいは「人が集まる場」になればいいと考えています。美術の展覧会を鑑賞するといった経験とはまた異なる、私たちの生活を豊かにする場を提供できたらと思っています。



11月17日(木)
世田谷おはなしネットワーク講演会
「隣の爺の昔話」

12月13日(火)・20日(火)
NPO・市民活動のための
ステップアップ講座
組織づくりのためのヒント／コツを学ぼう!!
12月23日(金)・祝／1月29日(日)
子どもワークショップ報告展
「14歳のワンピース」

12月23日(金)・祝・27日(火)
「みつける365日」参加者募集説明会!
12月28日(水)
新年を祝う・お正月飾りづくり
ワークショップ

冬(1~3月)

1月14日(土)
初回みつける365日
「ゼミ分け発表会」書き初め」
2月4日(土)〜3月26日(日)
始末をかくエキシビション
「生活はふるさとのように上演されている」
2月6日(月)〜17日(金)
子どもワークショップ報告展
「世田谷ロケハンアニメーション
in NHK 技研」

2月12日(日)
うたの記憶と出会うとき
クレオール・ニッポンの旅先から

2月12日(日)・25日(土)・3月5日(日)
インタースコアワークショップ
わかるとかわる 情報編集力「連続講座vol.2」
2月18日(土)
国際交流inせたがや2017

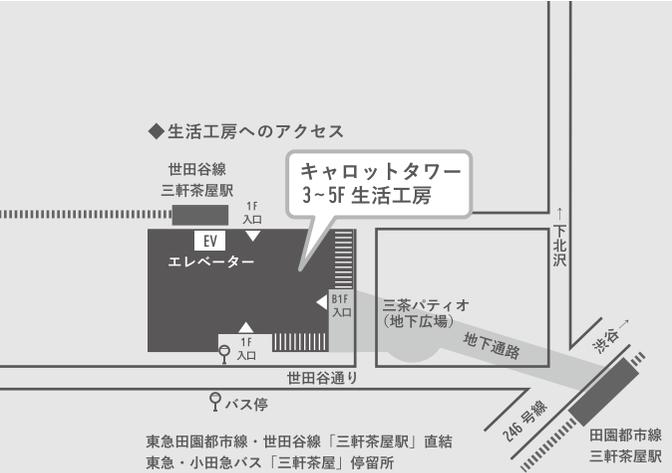
2月24日(金)・28日(火)
食べられるセミナー
夜と生活工房
3月4日(土)
第2回みつけるゼミ

3月7日(火)・21日(火)
NPO・市民活動のための
ステップアップ講座
組織づくりのためのヒント／コツを学ぼう!!
3月12日(日)・19日(日)・26日(日)
中学生次世代教室2017

通年事業

4月期・7月期・11月期・2月期
朗読講座
豊かなことばの世界
4月〜3月
「森里・海の連続」による豊かな海づくり
レリーフジオラマ





休館日・管理休館日：年末年始・月曜日（貸出施設のみ。祝日の場合は除く）
 所在地：東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー
 TEL：03-5432-1543
 URL：http://setagaya-ldc.net/



生活工房のホームページでは、
 僕たちが施設の案内をしてい
 るよ。ぜひみてね！

トップページ→施設のご案内→特集ページ「生活工房っていったいどんなところなの？」

生活工房 / 施設ガイド

生活工房は、地域の人々の活動や発表の場！

生活工房では多彩な設備を備えたスペースで独自の企画を行うほか、市民団体などにお部屋を貸し出しています。スペースごとに登録条件・利用方法などが異なりますので、詳細はお問い合わせください。

セミナールーム A

74㎡/定員 48名/利用時間 9:00 ~ 22:00
 貸出対象スペース



セミナールーム B

83㎡/定員 48名/利用時間 9:00 ~ 22:00
 貸出対象スペース



講演会やミーティングに最適

「セミナールーム」は、講習会や会議に適したスペースです。プロジェクターを含む映像・音響設備も備え、効果的なプレゼンテーションが可能です。A・B各部屋の可動式間仕切りを外せば最大で120名(机・椅子使用時は108名)まで収容できます。



ワークショップルーム A

126㎡/定員 50名/利用時間 9:00 ~ 22:00
 貸出対象スペース



ワークショップルーム B

145㎡/定員 50名/利用時間 9:00 ~ 22:00
 貸出対象スペース



ものづくりや展示を楽しむ

「ワークショップルーム A」は、ものづくりやトークイベントに対応したスペースで、併設されたキッチン(63㎡)には、各種厨房用品も備えています。多人数の交流会にも最適です。
 「ワークショップルーム B」は、扇形の壁面が特徴的な展示スペースです。可動パネルで室内のレイアウト変更ができ、多様な展示が行えます。音響や映像機器を使った集会等の開催も可能です。



生活工房ギャラリー

開館時間：9:00 ~ 20:00



市民活動支援コーナー

利用時間：9:00 ~ 21:00
 貸出対象スペース



生活工房の展示や市民活動の拠点

「生活工房ギャラリー」は、暮らしのデザインやクラフト、異文化紹介などをテーマに、生活工房が主催する企画展示を行っています(一般への貸し出しはしていません)。
 「市民活動支援コーナー」は、世田谷で活動している市民活動団体が打ち合わせや作業を行うことができるスペースです。パソコンや印刷機などの利用も可能です(有料)。



※森・里・海の連環による豊かな海づくり「レリーフジオラマ」(→p.50)は2F八角堂に常設しています。

生活工房に来る前&来た後、ここに寄っている!

リピーターおすすめ 三茶マップ

～2016年度モニターアンケートより～



地図に載らないその他のエリア

【三茶の帰りに寄る他の街(店)】
 松陰神社(ニコラス精養堂)
 三宿/世田谷公園
 下北沢/北沢川緑道
 二子玉川(高島屋、二子玉川ライズ)
 渋谷(ヒカリエ)
 駒場東大前(ルーシー)

- カフェ
- 本屋
- お買いもの
- 食事
- 街歩き/レジャー

■モニターについて

生活工房では、第三者による事業評価と認知度向上を目的に、モニター調査を実施しています。今年度は当施設へのリピーターの方を中心に調査にご協力いただきました。このマップは55名のモニターアンケートをもとに作成したものです。

たとえば、午後から開催の、生活工房のセミナーに参加するとき。ランチは何を食べようか? 少し空いた時間、どこに行く? イベントが終わった後、夕飯の買い物は? リピーターの方々に、生活工房周辺の行きつけのお店や場所について聞き、三軒茶屋駅周辺のマップを作成しました。

イラスト: 間芝勇輔

数字で見る 生活工房のデータベース

2016 2016.4.1 - 2017.3.31



来場者数

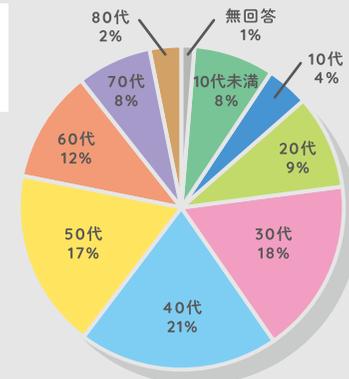
来場者総数	136,238名
展覧会	65,550名
ワークショップ	635名
セミナー・イベント	1,152名
地域と市民活動	34,531名
貸館使用者・来場者	34,370名

事業数

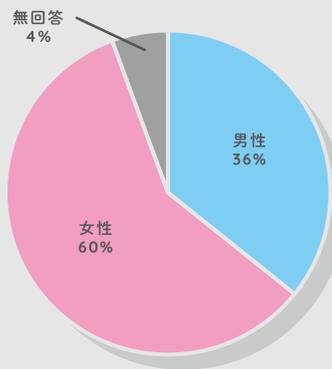
事業総数	74件
展覧会	13件
関連イベント	21件
ワークショップ	6件
セミナー・イベント	11件
地域と市民活動	23件

来場者の年代

10代未満の参加率が上昇。大人向けの企画でも、子どもも楽しめる工夫をしています



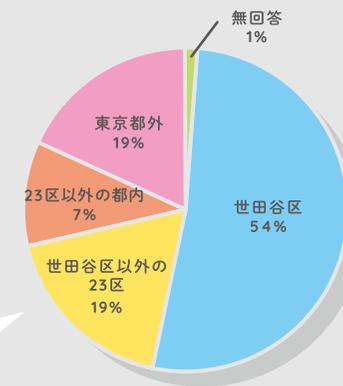
来場者の男女比



例年より男性来場者が増加。男性(男子)限定イベントを複数開催したこともその一因!

都外からのお客様が急増。遠くはハワイ、北海道、鹿児島などからお越しの方も!

来場者の住まい



*2016年度・来場者アンケート(1910件)より集計

生活工房 FLYER GALLERY



7



5



3



1



8



6



4



2

7. 「分解ワークショップ」パソコン&オーディオの仕組みとふしぎ!
デザイン=ふるやまなつみ

8. 新年を祝う「お正月飾りづくりワークショップ」
デザイン=サナダスタジオ

5. 中学生次世代車教室2017
デザイン=寄本好則(三軒茶屋ファクトリー)

6. 日本のポータブルレコード・プレイヤー展
デザイン=軸原ヨウスケ(COCHAE) 写真=高見知香

3. 留学生研究発表会 JAPONDER2016「獅子になる」
デザイン=坂本陽一(mots)

4. 食べられるセミナー「夜と生活工房」
デザイン=風景と食設計室 ホー

1. 7つの海と手しごと(第7の海) 北太平洋と北西海岸先住民のトーテム
デザイン・イラスト=大西隆介・沼本明希子(direction Q)

2. 男性のための 自分の「好き」を着こなす「着物編集ワークショップ」
デザイン=富山庄太郎

撮影:ただ(ゆかい)



15



16



13



14



11



12



9



10

15. 夏の子どもワークショップ
 デザイン=いすたえこ(NNNNY) マンガ=永井ひでゆき

16. 「穴アーカイブ」8ミリフィルム鑑賞会vol.2—穴からみえる、ひと、暮らし、世田谷
 デザイン=有佐祐樹(marqmw)

13. 始末をかくエキシビション「生活はふるさとのように上演されている」
 デザイン・イラスト=遠藤麻衣、小宮麻吏奈

14. 子どもワークショップ報告展
 デザイン=渡辺明日香

11. みつける365日—アーティストと探す「人生の1%」
 デザイン=キタダデザイン

12. うたの記憶と出会うとき—クレオール・ニッポンの旅先から
 デザイン=中島美佳 イラスト=しまだなな

9. いぬと、ねこと、わたしの防災「いっしょに逃げてもいいのかな?展」
 デザイン=高橋剛 イラスト=七字由布

10. DAYS JAPAN写真展2016 地球の上に生きる「世界の未来をつくるために」
 デザイン=世田谷社



あつめる あつまる 生活工房

ご支援・ご協力いただいた 企業、団体、教育・公共機関等

(各50音順・敬称略)

共催

イシス編集学校、NHK放送技術研究所、(一財)NHK放送研修センター日本語センター、世田谷アートフリマプロジェクト、世田谷おはなしネットワーク、世田谷海外研修者の会、世田谷区生活文化部市民活動・生涯現役推進課、(株)デイズジャパン、東京都立総合工科高等学校、トヨタ東京自動車大学校

協賛

トヨタ自動車(株)

協力

(株)アルテスパブリッシング、NPO法人ANICE、(一財)NHK放送研修センター、昭和女子大学大学院生活機構研究科心理学専攻清水裕研究室、世田谷区立中央図書館、世田谷区立児童館、世田谷獣医師会、世田谷233、瀬戸ノベルティ文化保存研究会、ソニー(株)、TSUTAYA三軒茶屋店、東京工芸大学、東京シネマ新社、(一財)名古屋陶磁器会館、日本大学文理学部社会学科後藤範章研究室、米国オキュパイド・ジャパンプラブ、北海道立北方民族博物館、松森町津軽獅子舞保存会、(公財)横浜市緑の協会 金沢動物園、(株)ユリーカ、(株)吉実園

後援

アメリカ大使館、カナダ大使館、世田谷区、世田谷区教育委員会



生活工房

2017年度事業(4～6月)のご案内

4.5(水)～5.14(日)

眞田岳彦ディレクション／衣服・祝いのカタチ「赤をめぐる旅」展

4.22(土)・23(日)

世田谷アートフリマ vol.27

5.20(土)～6.11(日)

DAYS JAPAN 写真展2017 地球の上に生きる「世界の未来をつくるために」

6.17(土)～7.23(日)

クレオール・ニッポンの旅 ― 無名詩人の民謡から、ニッポンを聴く

6.17(土)・6.24(土)・7.9(日)

イシス×生活工房「情報編集力連続講座」3日で編集力を身につける

※詳細はホームページをご覧ください。



生活工房アニュアルレポート2016
発行日:2017年4月22日

編集協力:杉本勝彦
デザイン:いすたえこ(NNNNY)、堀翼
表紙イラスト:間芝勇輔

協賛:株式会社東急コミュニティー
印刷:山田写真製版所
編集・発行:公益財団法人せたがや文化財団
生活工房
〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1
電話:03-5432-1543
ファックス:03-5432-1559
メール:info@setagaya-ldc.net
http://www.setagaya-ldc.net

本書の無断転写、複製、転載を禁じます。
©Setagaya Arts Foundation Lifestyle Design Center 2016-2017

生活工房アニュアルレポートとは――
生活工房の1年間の活動をまとめた記録・報告書です。